

石川県埋蔵文化財情報

第 29 号

巻頭図版（能瀬南B遺跡、加茂窯跡群、二ツ寺遺跡）

平成24年度上半期の発掘調査から ……………調査部長 福島 正 実…(1)

発掘調査略報

能瀬南B遺跡、加茂窯跡群（津幡町） ……………(2)

二ツ寺遺跡（金沢市） ……………(4)

小立野ユミノマチ遺跡（金沢市） ……………(6)

下新庄フルナワシロ遺跡（金沢市） ……………(7)

長池カチジリ遺跡、長池ニシタンボ遺跡（野々市市） ……………(8)

平成24年度上半期の遺物整理作業 ……………(10)

平成24年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録 ……………(13)

研究集会の目的、研究集会の内容 ……………(13)

北部九州を起点とした弥生時代の墓制 ……………常松 幹 雄…(14)

山陰地方における弥生時代の墓制～弥生時代後期を中心に～ ……………松井 潔…(17)

近畿北部の弥生墓制 ……………肥後 弘 幸…(20)

福井県における弥生時代の墓 ……………前田 清 彦…(23)

加賀地域における弥生時代の墓制について ……………下濱 貴 子…(26)

能登地域における弥生時代の墓制 ……………林 大 智…(29)

富山県における弥生時代の墓制 ……………青山 晃…(32)

新潟県における弥生時代の墓制 ……………加藤 由美子…(35)

東北地方日本海側における弥生時代の墓 ……………木村 高…(38)

討論と見学会について ……………岩瀬 由 美…(41)

調査研究

平成24年度学習講座 「須恵器づくり」の概要 ……………大西 顕…(43)

2013年 3 月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

能瀬南B遺跡

遺跡遠景（南西から）

旧河北潟東縁を望む標高 24～29m の丘陵上に立地する弥生時代後期後葉の遺跡である。尾根上や南東側斜面上部において大型土坑や溝等を確認した。斜面に位置する大型土坑は斜めに削られており、地滑りに伴い流失したとみられる。かつての尾根上部はより幅をもち他にも遺構が存在した可能性がある。尾根先端部では尾根上部と斜面を画するような溝も確認された。

加茂窯跡群

2号窯全景（南東から）

能瀬南B遺跡の存在する丘陵先端部東側斜面に立地する。7世紀前半の須恵器窯跡群であり、現在までに2基が確認されている。平成22年度に1号窯の調査が行われており、本年度は2号窯の調査を行った。2号窯は地滑りや後世の削平により窯体の大半が失われており、遺存は窯奥部の床面延長約4mであった。



能瀬南B遺跡遠景（南西から）



加茂窯跡群2号窯全景（南東から）

写真解説

二ツ寺遺跡

調査区遠景（南東から）

金沢市二ツ寺町地内に所在し、犀川広域河川改修工事の際に確認された遺跡である。現海岸線まで2.7kmの沖積地に立地する。調査地点は犀川下流右岸の河川敷で、対岸に以前の流路蛇行痕がみられる箇所にあたる。

「大規模な凹み」の堆積土

東西径約15m、南北径約12m、深さ5m以上を測る大規模な凹みが確認された。凹みには腐葉土やシルトの薄層が中心に向かって斜め下がりに傾斜堆積していた。遺物は多くないが、縄文晩期末から近世末に及ぶ時期幅をもった土器類などが層序に従い、出土している。



調査区遠景（南東から）



「大規模な凹み」の堆積土

平成24年度上半期の発掘調査から

調査部長 福島 正実

平成24年度は、石川県教育委員会から12件の発掘調査を受託した。前年度と同様に県関係事業に係る小規模な調査が多く、調査面積も前年度より減少した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省が3件、鉄道・運輸機構1件、県企画振興部1件、県環境部1件、県土木部5件、県教育委員会事務局1件であった。本号では平成24年4月から8月にかけて当法人が実施した5件、7遺跡の発掘調査の概要を紹介する。

津幡町能瀬南B遺跡では丘陵頂部付近で弥生時代後期の円筒形の大型土坑を確認した。本遺跡の南側斜面に重複して立地する同町加茂窯跡群では昨年度検出した7世紀前半代の須恵器窯1基（加茂第2号窯跡）の調査を行った。立地する斜面の崩落が著しく、窯体各部の多くが流失しており、窯尻付近の床面を延長約4mほど確認できた。

金沢市二ツ寺遺跡では、長径15m、深さ5m以上の大規模な凹みを確認した。覆土の堆積順に縄文時代から近世に至る各時代の土器片などが出土した。湧水など自然現象による形成が窺われる。その他に古墳時代の溝、近世以降の井戸なども確認した。

同市小立野ユミノマチ遺跡は江戸時代の城下町跡である。今年度は今後予定される本発掘調査に備えるため、遺構検出面までの深さなどを把握する確認調査を実施し、近世の土坑を確認した。

野々市市と金沢市の市境に位置する下新庄フルナワシロ遺跡は奈良・平安時代の集落跡であり、奈良時代から平安時代初頭頃と推定される竪穴建物、平安時代と推定される掘立柱建物やそれに関連するとみられる土師器埋納遺構、川跡などを確認した。なお、本号では右岸側調査区（金沢市）について略報を掲載した。

野々市市長池カチジリ遺跡は弥生時代、古墳時代などの集落跡であり、弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物、土坑、溝、中世の河道を確認した。同市長池ニシタンボ遺跡は長池カチジリ遺跡と近接した弥生時代などの集落跡であり、弥生時代後期の柱穴、土坑、中世の溝を確認した。

平成24年度発掘調査遺跡

No	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積(m ²)	主な時代	関係機関	関係事業
1		七尾城跡	七尾市古屋敷町	310	中世	国土交通省	能越自動車道（七尾水見道路）
2		千野遺跡	七尾市千野町	3,400	弥生～平安	〃	
3		古府・国分遺跡	七尾市国分町	2,280	奈良～中世	〃	一般国道159号（七尾バイパス）
4		福井ナカミチ遺跡	志賀町福井	1,500	弥生、平安	石川県土木部	主要地方道志賀田鶴浜線
5	○	能瀬南B遺跡	津幡町能瀬	2,820	弥生	〃	主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）
		加茂窯跡群	〃		古墳		
6		大友E遺跡	金沢市近岡町	370	弥生～平安	石川県環境部	石川県水道用水供給
		直江北遺跡	金沢市直江町	480	縄文～中世		
7	○	二ツ寺遺跡	金沢市二ツ寺町	6,000	縄文～近世	石川県土木部	二級河川犀川
8		金沢城跡	金沢市広坂2丁目	840	奈良・平安、中世、近世	石川県企画振興部	都心地区整備推進
9	○	小立野ユミノマチ遺跡	金沢市小立野5丁目	43	江戸	石川県教育委員会	県立金沢商業高等学校
10	○(※)	下新庄フルナワシロ遺跡	金沢市四十万町、野々市市新庄3丁目	1,110	奈良・平安	石川県土木部	二級河川高橋川
11	○	長池カチジリ遺跡	野々市市長池	880	弥生、古墳、中世	〃	二級河川安原川
		長池ニシタンボ遺跡	〃	240	弥生、中世		
		二日市イシバチ遺跡	野々市市北西部土地区画整理事業地	620	弥生、古墳、中世		
12		宮保B遺跡	白山市宮保町	380	中世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線
計		12件(本号未掲載等8件は次号で掲載予定)		21,273			

(※本号（第29号）と次号に分割して掲載)

のせみなみ 能瀬南B遺跡、かもかまあとぐん 加茂窯跡群

所在地 河北郡津幡町能瀬地内

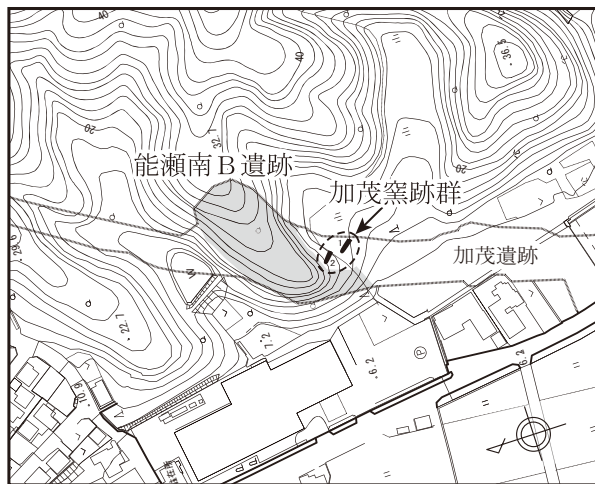
調査面積 2,820㎡

調査期間 平成24年4月10日～同年8月8日

調査担当 澤辺利明 山 晶裕 木原伊織



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/4,000)

調査成果の要点

- ・**能瀬南B遺跡** 丘陵上に立地する弥生時代後期後葉の遺跡であり、尾根上と南東側斜面上部において大型土坑や溝等を確認した。斜面で検出した大型土坑の形状からみて、かつての尾根上部はより幅をもち他にも遺構が存在した可能性がある。
- ・**加茂窯跡群** 7世紀前半の須恵器窯跡群であり、本年度は2号窯の調査を行った。地滑りや後世の削平により窯体の大半が失われており、窯奥部床面約4mが遺存していた。

能瀬南B遺跡は旧河北潟東縁を望む標高24～29m（低地部の標高約11m）の尾根上に、加茂窯跡群はその丘陵先端部東側斜面に立地する。窯跡南東側では加茂遺跡に重複する。

調査は主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）改築事業を原因とし、いずれも昨年度に続く調査となる。

能瀬南B遺跡 丘陵尾根上と南東側斜面上部において弥生時代後期後葉の土坑や溝、小穴などを確認した。土坑の中には大型土坑3基があり、最大のもので直径約2m、深さ約2mを測る。うち

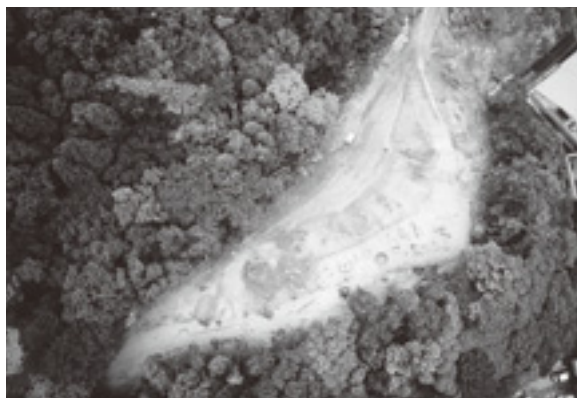
南東側斜面に位置する2基は大きく斜めに削られており、斜面の地滑りに伴い削平されたとみられる。かつての尾根上部がより幅を持っていたことがうかがわれるものであり、他に遺構が存在していた可能性がある。また、尾根先端部では、尾根に直行して幅約1m、深さ約50cmの溝が存在した。削平を受けており本来の規模は不明だが、その位置からみて尾根上と斜面を画する用途が推測される。

加茂窯跡群 昨年度に存在を確認した須恵器窯1基（2号窯）の調査を行った。地滑りにより窯体の大半が流失、窯裾部では後世の削平も加えられ、遺存は窯奥部の床面延長約4mであった。類例からみて本来の窯体長は10m前後であろう。遺存箇所で窯床幅1.8m、傾斜57°。還元色をなす床面には置台にもちいた小礫埋設跡の凹みが認められた。床やわずかに残る壁面の被熱状況等からみて操業は1回のみと推測される。出土遺物は10数点と少ないが、平成22年度に調査された1号窯と同じく7世紀前半に位置付けられる。本窯跡群周辺ではかほく市多田や金沢市観法寺町地内において単発的に営まれる該期の窯跡が知られてきており、加茂遺跡等の周辺遺跡との関わりも含め、その消長の経緯が注目されるものである。

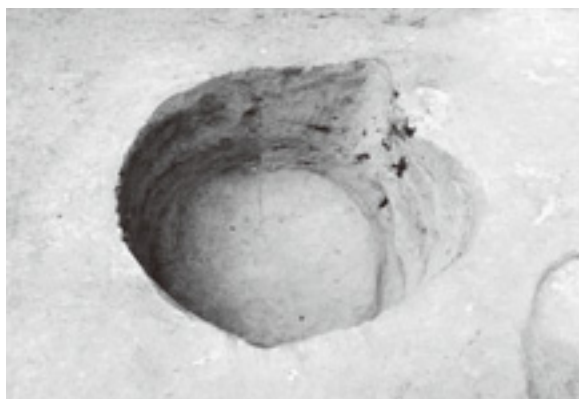
（澤辺利明）



能瀬南B遺跡：遠景（北東から）



能瀬南B遺跡：尾根上調査区完掘状況（俯瞰）



能瀬南B遺跡：大型土坑完掘状況（東から）



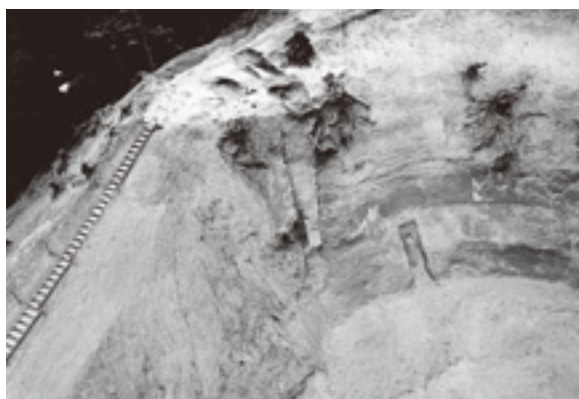
能瀬南B遺跡：削平を受けた大型土坑（南から）



能瀬南B遺跡：尾根先端 溝完掘状況（北西から）



能瀬南B遺跡：発掘作業風景（北東から）



加茂窯跡群：2号窯遠景（南東から）



加茂窯跡群：2号窯完掘状況（南東から）

二ツ寺遺跡

所在地 金沢市二ツ寺町地内

調査面積 6,000㎡

調査期間 平成24年4月26日～平成24年8月10日

調査担当 北川晴夫 岩瀬由美 和田龍介

荒川真希子 中泉絵美子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・縄文時代～近世の遺跡である。
- ・検出した遺構には溝、井戸、柱穴などがある。
- ・東西径約15m、南北径約12m、深さ5m以上を測る「大規模な凹み」を検出した。
- ・立地と検出状況から、「凹み」は湧水点に関連することが考えられる。
- ・出土した土器の年代などから、「凹み」では、堆積が長期にわたって継続した可能性がある。

遺跡は沖積平野に立地し、海岸までは直線距離で2.7kmを測る。調査地点は犀川下流の右岸旧堤防敷にあたる。周辺の水田面の標高は3.3m程度を測る。犀川広域河川改修工事に伴い調査を行った。

検出した遺構には溝、井戸、柱穴などがある。また、調査区中央やや北寄りにおいて、東西径約15m、南北径約12m、深さ5m以上を測る「大規模な凹み」を確認した。

溝は10条以上を検出した。大半が近世以降の耕作関連溝であるが、調査区西側で検出した古墳時代の溝は、工事による削平で途切れていたが、大規模な凹みから延びる別の溝と元々は一連のものであったと考えられる。

井戸は、近世以降のものを5基検出した。調査区中央で確認した井戸は、節を抜いた竹が導水管として中央に据付けられ、検出面より約1m下方で、管端にシュロが巻かれていた。シュロは砂が竹へ流入するのを防ぐために巻かれたものである。素掘りの井戸には、底に小砂利が溜まっているものがあり、調査時点でも湧水が認められた。

柱穴は、やや不確実なものも含め数基が調査区中央部などで検出された。年代は不明。

大規模な凹みは、輪郭を確認した時点で上記の溝が取り付いていたことから、湧水点とそこからの流出溝である可能性が考えられた。掘り進めると凹みはやはり深いもので、完掘は断念せざるを得なかったが、上記の可能性を減じるものではないであろう。作業のなかで、凹みの堆積土が意外なほど長い時間幅をもつことが明らかになった。凹みの堆積土層は、傾きの大小はあるが、一様に中心に向かって斜め下がりになっていた。含まれる土器は少ないながら、上から下へ、また、凹みの中心から縁に向かって、陶磁器、土師器・須恵器、弥生、縄文と順次古くなっており、長期にわたる成層堆積であることを示唆する。完全形に近い土器が割合多く、平安時代の土師器碗2枚が重なって見つかるなど、祭祀をうかがわせる状況もあった。土器の他に、オニグルミや多量のトチの実、樹齢150年を数える大木の幹などが確認されており、古環境の復元にも資する。

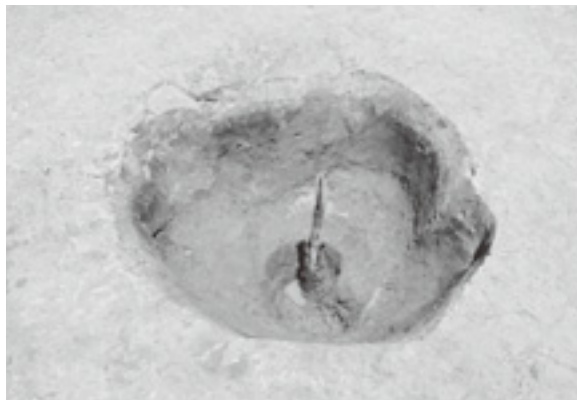
本遺跡は工事により削平を受けているが、「大規模な凹み」の堆積土に含まれる出土遺物から、調査地及びその周辺には縄文時代～近世の遺跡が存在していたとみられる。(北川晴夫)



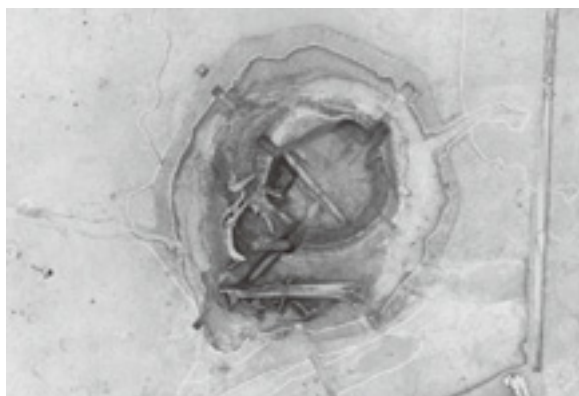
調査区全景（北西から）



溝（古墳時代 東から）



井戸（近世以降 南西から）



「大規模な凹み」（真上から）



「大規模な凹み」土層断面（部分）

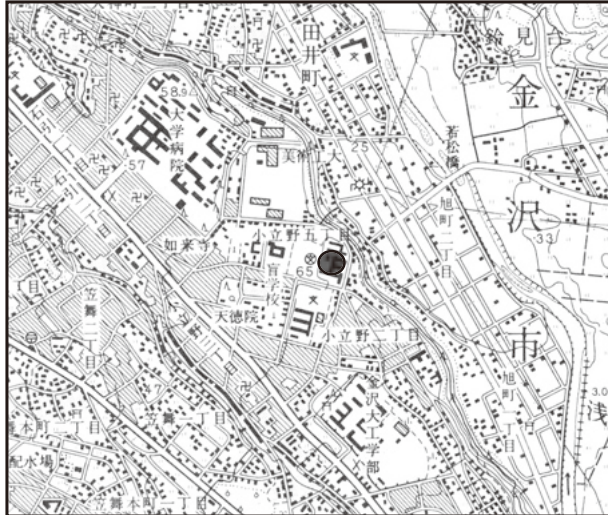
小立野ユミノマチ遺跡

所在地 金沢市小立野5丁目地内

調査面積 43㎡

調査期間 平成24年7月31日～同年8月30日

調査担当 谷内明央 荒川真希子



遺跡位置図 (S=1/25,000)

本遺跡は金沢市内を流れる犀川と浅野川に挟まれた小立野台地上に立地し、金沢商業高等学校敷地内に位置する。同校の建て替えに伴って平成22・23年度に発掘調査が行われており、平成24年度は遺跡の範囲・性格・内容等を把握するためのトレンチによる確認調査を行った。

平成22年度の調査では、東西および南北方向の区画溝や堀、礎石を伴う建物、柵列あるいは建物を構成すると見られる小穴、土取り穴、井戸、小溝群などを検出した。遺物では、肥前や瀬戸・美濃などの陶磁器や灯明皿として使用された土師器皿のほか、砥石や硯などの石製品、銅銭・煙管・鉄砲の弾などの金属製品、筭・小

玉などのガラス製品が出土している。

平成23年度の調査では、18～19世紀の屋敷地を区画する東西方向の溝、礎石を伴う建物、土取り穴、小溝群などを検出した。調査区中央に区画溝があり、遺構はその北半部に多く南半部は少ない。出土遺物の様相は平成22年度調査と同様だが、注目すべき遺物として「吉村平太夫」と墨書された陶器の鉢が挙げられる。加賀藩士の由緒や系図を記した『先祖由緒並一類附帳』に弓や鉄砲を扱った足軽としてその名を確認できることから、出土した遺物には、当時足軽屋敷で暮らしていた人々が使っていた道具が多く含まれている可能性が高い。江戸時代の絵図によると、平成22・23年度の調査地は、加賀藩の重臣横山家の下屋敷および弓持ちの足軽屋敷が置かれていた場所にあたり、武家地の一角とみられる。

平成24年度はトレンチによる確認調査で、昭和期の現校舍棟建設工事がどの程度遺跡に影響したかを把握することに努めた。現校舍棟に隣接する箇所を中心に2×1mほどの大きさのトレンチを20箇所設定し、調査した結果、近世の大型土坑や溝などを確認した。平成22・23年度調査の結果を踏まえると、大型土坑は土取り穴、溝は小溝群の一部となる可能性が高い。(谷内明央)



掘削作業



掘削完了

しも しん じょう 下新庄フルナワシロ遺跡

所在地 金沢市四十万町地内
調査面積 360㎡（右岸 金沢市域分）

調査期間 平成24年4月25日～同年5月30日
調査担当 岩瀬由美 矢部史朗



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区遠景 (南西から)

た柱穴なども見つかっており、掘立柱建物に関連する地鎮等、何らかの祭祀が執り行われたとみられる。柱穴がやや散発的になる南端部では旧高橋川の流路を検出しており、溝底から須恵器が出土したことより、古代以降の流路と判断される。

遺物は須恵器や土師器に加え、少量の緑釉陶器なども出土した。

なお、左岸についても平成24年秋に調査を行っており、その成果は次号に掲載予定。（岩瀬由美）



竪穴建物 (北東から)



土師器埋納遺構調査風景

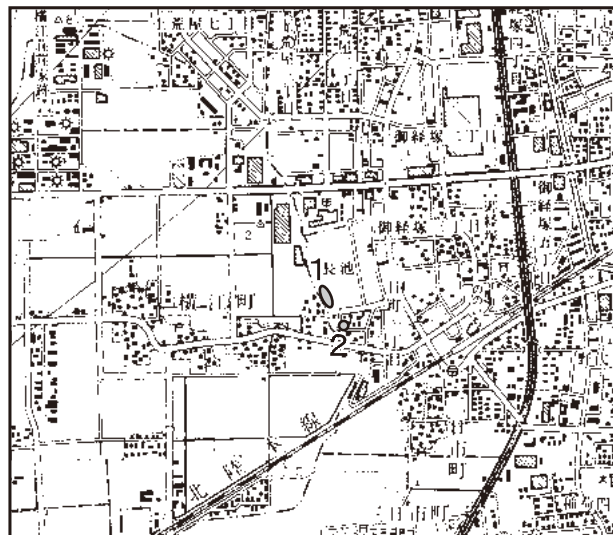
長池カチジリ遺跡、長池ニシタンボ遺跡

所在地 野々市市長池地内

調査期間 平成24年7月2日～同年8月31日

調査面積 1,120㎡（長池カチジリ遺跡：880㎡、長池ニシタンボ遺跡：240㎡）

調査担当 白田義彦 中泉絵美子



1 長池カチジリ遺跡 2 長池ニシタンボ遺跡
遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

長池カチジリ遺跡

- ・手取川扇状地扇央部に位置する弥生時代後期～終末期を中心とする集落。
- ・弥生時代の掘立柱建物と中世以降の河道を検出した。

長池ニシタンボ遺跡

- ・弥生時代終末期を中心とする集落と中世後半の集落。
- ・弥生時代の土坑・溝と中世後半の溝を検出した。

長池カチジリ遺跡と長池ニシタンボ遺跡は手取川扇状地扇央部に立地し、野々市市の北西部、JR野々市駅から約500m北西に所在する。今回の調査は手取川水系の七ヶ用水のうちの郷用水である安原川の河川改修工事に伴うものであり、長池カチジリ遺跡の南側に長池ニシタンボ遺跡が位置し、両遺跡は約50m離れている。両遺跡の間には試掘調査により、鞍部の存在が想定されている。

長池カチジリ遺跡は昨年度、長池ニシタンボ遺跡は平成21年度にそれぞれ調査が行われており、今回の調査は両遺跡ともその隣接部の調査となる。

長池カチジリ遺跡は昨年度、長池ニシタンボ遺跡は平成21年度にそれぞれ調査が行われており、今回の調査は両遺跡ともその隣接部の調査となる。

長池カチジリ遺跡

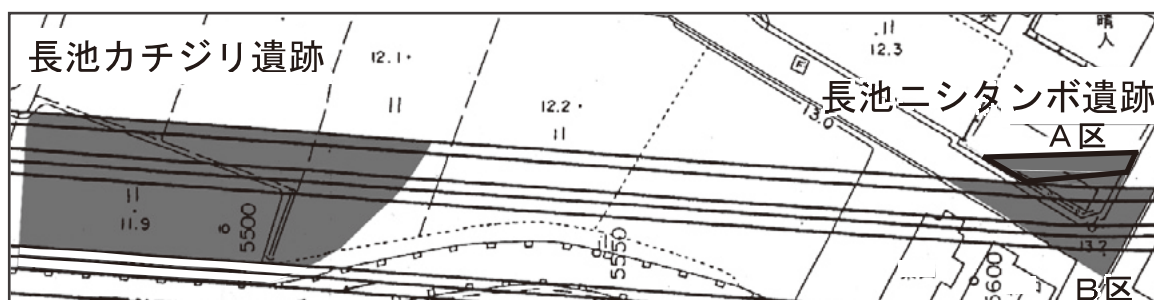
昨年度調査区の南側隣接部の調査で、幅約20m、長さ約50mの調査区である。昨年度調査区に近い隣接部周辺では掘立柱建物が検出され、掘立柱建物域が今年度調査区まで広がっていることを確認した。掘立柱建物（写真参照）は1×2間、2×2間の規模で、弥生時代後期後半～終末期に収まるものであろう。

調査区北側では同時期の溝（SD2、写真参照）と中世の河道を検出した。SD2の幅は約1.5m、深さ約50cmを測り、溝底で弥生土器が多く出土（写真参照）した。溝の埋土はラミナ状に堆積し、水路と考えられる。中世の河道は、幅約5m、深さ約1.5mを測り、東西方向に流れるものであった。

長池ニシタンボ遺跡

平成21年度調査区の東側隣接部の調査で、幅約20m、長さ約30mの不定形な調査区であり、2回に分けて調査し、最初にA区（約40㎡）、次にB区（約200㎡）の調査を行った。今回の調査では弥生時代の土坑（SK1、写真参照）、溝、中世の溝などを検出している。平成21年度の調査では弥生時代終末期を中心とするとする時期の竪穴建物を2棟検出しており、弥生時代の遺構はその竪穴建物と同時期の可能性が高い。中世の溝は幅約1.5m、深さ約30cmを測り、前回の調査で検出した溝に繋がるもので、中世後半に比定されよう。

（白田義彦）



調査区位置図 (S=1/1,000)



長池カチジリ遺跡完掘状況 (北から)



長池カチジリ遺跡掘立柱建物 (東から)



長池カチジリ遺跡 SD 2 遺物出土状況 (東から)



長池ニシタンボ遺跡 A 区完掘状況 (北から)



長池ニシタンボ遺跡 B 区完掘状況 (北から)



長池ニシタンボ遺跡 SK 1 遺物出土状況 (南から)

平成24年度上半期の遺物整理作業

国関係調査グループ

上半期は、小立野ユミノマチ遺跡（金沢市、平成23年度調査）の遺構図トレース、金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）（金沢市、平成21～23年度調査）の整理作業を行った。

小立野ユミノマチ遺跡の遺構図トレースは、4月の上半期で、作業の半分をおこない、残りを2月に実施する予定である。

金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）は、3年度に亘る出土品の中でも3～6区を担当した。作業は木器から始まったが、点数もかなりの量があり、遺物の取上げ区分を細かく確認しながら、分けるという基礎的な作業においてすら、相当の労力と時間が費やされた。通称「金沢下駄」と呼ばれる物や板草履、房楊枝、大きな樽なども実測した。漆器も多数あったため、部屋に保管用の冷蔵庫が持ち込まれた。又、布も出土しており、慎重に広げると縫い合わされていて、元の形状に思いがめぐらされた。

続いて実施した土器などの接合は、陶磁器が中心で、古伊万里や織部、広坂焼、軍隊茶碗などを含み、珠洲焼もあった。見慣れた土師器の破片を裏返すと金箔が残っていたり、陶器に線刻されている物も数点あったが、完形に復元するまでにはいたらなかった。火事のためか煤けている物も多く、染付の模様がくすんでしまい、その後の実測が思いやられた。接合の終了前に特定事業調査グループと共に1～6区の陶磁器類を部屋全体に広げて接合する時間も設けたり、丸瓦の瓦列をテーブル上で再現することで、その組み方が理解できた。

（村上泰子）



遺構図トレース（小立野ユミノマチ遺跡）



記名・分類・接合（金沢城下町遺跡）



記名・分類・接合（金沢城下町遺跡）

県関係調査グループ

上半期の大半が小立野ユミノマチ遺跡（金沢市、平成23年度調査）の作業になった。昨年度も当グループが整理作業に関わったが、前年と同じく、ほとんどが近世の遺物であり、中でも、すり鉢、火鉢が多かった。発掘調査地点の家の主なのか、鉢の底面いっぱい「吉村平太夫」と墨で書かれたものがあった。器類は、前年より色絵や銅板転写のものが多く感じた。把手が亀の形になっている蓋、ヤリガンナで文様を付けた片口の鍋や五徳も多く見られた。猿が灰吹きを抱えているものがあり、灰吹きの口縁部分に煙管の跡と思われるものが付いていた。買い求めた物なのか、注文品なのだろうかと思った。

次に加茂遺跡（河北郡津幡町、平成22、23年度調査）の選別作業を行った。一部に7世紀の須恵器窯出土品を含むものであった。

続いて金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）（金沢市、平成22年度調査）の石製品の実測に入った。当グループの分担分にも「庭石」、「景石」といった大きく、重いものがあり、意のままに

は動かせないため、屋外での作業を余儀なくされた。厳しい残暑の中、太陽の動きと共に石表面の調整痕が少しの時間の経過の中でも異なって見えてくる。少々、難儀な作業となった。（小林直子）

上半期の出土品の洗浄は、平成23年度に調査した9遺跡を7月まで行い、8～9月前半は金沢城調査研究所が現地調査を担当した金沢城跡の出土品（瓦）について行った。9月後半からは、平成24年度に調査をした二ツ寺遺跡、能瀬南B遺跡、加茂窯跡群の出土品の洗浄作業を行った。（土屋宣雄）

特定事業調査グループ

上半期は、額新町遺跡（金沢市、平成23年度調査）、道村B遺跡（白山市、平成22年度調査）、金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）（金沢市、平成21年度・平成22年度・平成23年度調査）の整理作業を行った。

額新町遺跡は実質2日間の短い作業期間で土器、石製品の記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレースを行った。

道村B遺跡は、土師器、須恵器、金属製品などの実測・トレース作業を行った。遺構図トレースの240枚という多さに大変な思いをしたことが記憶に残っている。

続いて金沢城下町遺跡（丸の内7番地点）の記名・分類・接合作業に入った。接合は同じ金沢城下



記名・分類・接合（小立野ユミノマチ遺跡）



トレース（小立野ユミノマチ遺跡「猿の灰吹き」）

町遺跡の選別作業を4月初旬から行っている国関係調査グループと並行、そして引き継いで行った。遺物の量が多い上に調査区が細分化され、また複数面調査であったために、担当整理作業グループをまたいで遺物が接合する場面も多々あるなど、記憶力と労力をフル回転させての接合作業となった。

出土品は土師器・瀬戸・美濃・肥前・唐津などの陶磁器、金属製品、木製品、石臼・石鉢・硯・砥石・碁石・などの石製品で多種に及んだ。

実測は金属製品、木製品から入った。金属製品には銅銭や煙管・分銅・秤受け皿などがあり、木製品には漆器椀・曲げ物底板・箸・下駄などの小型品から大型の杭までいろいろあり、それぞれ描きごたえのあるものであった。その後土器類の実測に移り、これが下半期へと続く作業となった。
(林かおる)



石製品の接合（金沢城下町遺跡）



陶磁器の接合（金沢城下町遺跡）



分類・接合（金沢城下町遺跡）（地区間接合の確認）

平成24年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録

研究集会の目的

日本海沿岸の各地では、毎年、新たな遺跡の発見が相次いでいます。石川県でも、これまでの調査研究により蓄積した成果は膨大な量にのぼり、これをどのように活用するかが課題となっております。

本県ではこうした研究成果を活用し、また、日本海沿岸各地の歴史的理解をととして、本県の歴史・文化を研究することを目的に「環日本海文化交流史調査研究集会」を開催いたしております。本年度は「弥生時代の墓」をテーマとして、日本海沿岸の弥生時代の墓制を整理することで被葬者と社会集団を探り、地域間交流を明らかにしたいと考え、次の内容で研究集会を開催しました。

研究集会の内容

1 テーマ 「弥生時代の墓」

2 趣 旨 大陸から北部九州へ伝わり日本列島を東へと広まった弥生文化は、各地に新しい生活と社会形成をもたらし、日本海沿岸域は、その主要な伝播ルートの一つと推定されている。

今年度の研究集会では、日本海沿岸域を通じて認められる弥生時代の墓制を整理することで、埋葬された人々と社会集団を探り、その特徴から地域間の交流を明らかにすることを目的としたい。

3 内 容 ・開会の挨拶

・地域別報告

九州地方	福岡県	常松幹雄	(福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課)
山陰地方	鳥取県	松井 潔	(財団法人鳥取県教育文化財団調査室)
近畿地方	京都府	肥後弘幸	(京都府教育庁文化財保護課)
北陸地方	福井県	前田清彦	(鯖江市教育委員会文化課)
	石川県Ⅰ	下濱貴子	(小松市埋蔵文化財センター)
	石川県Ⅱ	林 大智	(財団法人石川県埋蔵文化財センター)
	富山県	青山 晃	(公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所)
	新潟県	加藤由美子	(長岡市教育委員会)
東北地方	青森県	木村 高	(青森県埋蔵文化財センター)

・討論

4 期 日 事前の打合 10月25日(木)(午後3時～、当センター会議室)

研究集会 10月26日(金)(午前9時～午後4時30分)

資料見学会 10月27日(土)(午前9時～12時)

5 場 所 石川県埋蔵文化財センター 研修室

6 参集者 当法人職員、県内外の埋蔵文化財関係者、考古学研究者、大学生等の90名

なお、本年度の研究テーマの「弥生時代の墓」は、平成20年度に開催した研究集会「弥生時代の家と村」と関わるものである。

北部九州を起点とした弥生時代の墓制

常松 幹雄（福岡市経済観光文化局 埋蔵文化財調査課）

はじめに

北部九州の墓と副葬品の在り方は、東アジアにおける時代背景や交流の状況を反映している。ここでは、まず「1 北部九州における墓の変遷」で主要墓群の状況を概観し、「2 有力層墓の出現と区画墓の機能」で有力層墓の特徴を明らかにする。そして「3 朝貢国から外臣へ」では、漢帝国との関係のなかで倭人社会の画期を見出す。「4 東アジアにおける弥生後期の墓制」について後期の墓制から看取される情報を分析して結びとする。

1 北部九州における墓の変遷（表1）

北部九州の墓制を象徴する甕棺墓は、現在3万基近くが確認されている。そのうち成人用の大型甕棺（成人棺）は全体の3分の1で、およそ1万基にのぼる（小池 2010）。集団墓における主体部の構成は、地域や時期によって異なり、甕棺墓と木棺墓（石槨墓を含む）や石棺墓（石蓋土壙墓を含む）などと共存する場合が多くみられる。表1は、北部九州の主要墓群の変遷を平野や主要水系ごとに配したもので、主体部の構造を、Kは甕棺墓、Mは木棺墓、Sは石棺墓の略で示したものである。

表1 北部九州における主要墓群の様相

時期	唐 津	糸 島	早 良	福岡・糟屋	筑 紫	佐 賀	宗 像	遠賀川流域	周縁地域
I (前)	大友 M 葉山尻 S	新町 K・M 石崎矢風 K・M	入部 K 藤崎 M 田村 K	雑餉隈 M 下月隈天神森 M・K	峯 M 中寺尾・剣塚 K	久保泉丸山 S 礫石 BS	田久松ヶ浦 M		
I (後)	宇木汲田 K・ 中原 K	志登・新町 K・M	藤崎 K 吉武 K	伯玄社・金隈 K・M 松ヶ迫 K	中寺尾・剣塚	東山田一本杉 ・増田	久原 M		宇久松原 K・ 笛吹 K(五島)
II (前)	朝鮮細型銅剣文化複合 徳須恵 K 宇木汲田 K	飯氏 K・M 石崎 K	吉武高木・吉 武大石 K・M 岸田 K・有田 K・野方久保 K	板付田端 K 金隈 K 皇石 K・馬渡 東ヶ浦 K	大木・三沢ハ サコの宮 K 国分松本 K	東山田一本杉 K 尼寺一本松 K 本村籠 K	朝町竹重 M	金丸 M 慶ノ浦	里田原(北松 浦) 金海 K(慶南) 梶栗浜 M(長 門) 白寿 K(薩摩)
II (後)	宇木汲田 K	久米 K 向原 K	吉武大石 K・M 岸田 K・M	比恵 K・M 諸岡 K 門田 K・金隈 K	永岡 K 国分松本 K	吉野ヶ里墳丘 墓 K・柚比 K・M 高志神社 K	朝町竹重 M 田熊石畑 M	金丸 慶ノ浦・原田	石田大原(老 岐)・神ノ崎 (五島)
III	宇木汲田 K	西古川 K、 飯氏 K	吉武樋渡 K 浦江 K	須玖岡本 門田・金隈	隈・西小田 国分松本	吉野ヶ里墳丘 墓・柚比	久原 M	鎌田原 K・M	
IV (前)	中原 K	井原塚廻 K、 三雲南小路 K	吉武樋渡 K 東入部 K 岸田 K	須玖岡本 D 地点 K 上月隈 K	東小田峯 隈・西小田	吉野ヶ里墳丘 墓 K	富地原梅木 SK	立岩 K 鎌田原 K・M	吹上 K(日田) 富の原 K(大 村) 景華園 K(島 原)
IV (後)	中原 K	三雲南小路 K	有田117次 丸尾台 K 浦江谷 K	門田 K 弥永原 K	立明寺 K 道場山 K	二塚山・柚比 K・M	富地原梅木 M 朝町竹重 M	立岩 K	
V (前)	桜馬場 K	井原鑑溝 K 三雲・井原ヤ リミゾ M・K	有田117次 K 西新町 K 浦江谷 K	須玖岡本 B・ 宝満尾 M・宮 の下 K 弥永原 M・K	道場山 K 吉ヶ浦 K	二塚山 K 三津永田 K 石動四本松	朝町竹重 M	五穀神社 S 笹原石棺墓	地藏堂 S(長 門) 塔の首 S(対 馬)
V (後)	中原 M・K	飯氏 K-7 平原1号墓 M 泊熊野 K	野方塚原 K	臼佐原 S	良積 K	枕島山 S 尼寺一本松 K 城原三本谷 S	徳重高田 S	原田 S-1	原ノ久保(老 岐)・前田山 (京都)
VI	三国	東二塚 K 東五反田 K 三雲寺口 S- 2	野方中原 S 野方塚原 K	博多遺跡群 K	良積 K 祇園山 S・K				徳永川の上 S (京都)

※ 時期区分は、I期：早期～前期 II期：中期初頭～前葉 III期：中期中葉 IV期：中期後葉 V期：後期 VI期：終末・古墳早期とする。

2 有力層墓の出現と区画墓の機能（図1）

弥生時代の集団墓のなかで副葬品を有するものや副葬品はないが集団墓のなかで墓壙が立派で、墓群の中心に位置する墓は、有力層墓とよばれる。北部九州において有力層墓の萌芽は、磨製石剣や柳葉形磨製石鏃を副葬する支石墓や石槨墓などが出現する弥生早期から前期の古段階に認められる。

墳丘や溝によって周囲の墓群と差別化をはかる区画墓は、筑紫の峯遺跡（福岡県筑前町）のように弥生前期前半には出現し、Ⅱ期前半には板付田端、Ⅱ期後半にはⅢ期・Ⅳ期まで存続する吉野ヶ里遺跡の墳丘墓、Ⅲ期には吉武樋渡で墳丘墓が造営される。

弥生中期に、青銅の武器の副葬が始まると有力層墓は多様化し、副葬品や墓の構造などの面で重層性が顕著となる。そして中期後半（Ⅳ期）に有力層墓のなかで副葬品と装身具が際立ち、墳丘や標石など突出した構造をもつ厚葬墓が出現した。三雲南小路と須玖岡本D地点である。区画墓を構成する墳丘や区画溝、標石は、厚葬墓と周囲の墓群を差別化するための装置と捉えることができる（常松 2011）。

3 朝貢国から外臣へ

「楽浪海中有倭人、分爲百余国、以歳時来献見云」『漢書』地理誌には、倭人が東夷の絶域から皇帝の徳を慕って朝貢を行なった様子が記されている。前1世紀、倭人は、朝貢国として前漢に容認され、銅鏡や璧、辰砂、鉄素材など漢代の文物の流入を推し進めた。そして漢式鏡などを有力層の間に再分配し、墓に副葬することで権威を継承するシステムを確立した。

1世紀前後の北部九州は、漢からみれば東夷からの情報の起点であり、本州・四国にとっては東アジア世界への門戸としての役割を担っていた。57年、北部九州を領域とする「倭奴国」は、対外交渉の主導権を握り、金印『漢委奴国王』の入手を果たす。志賀島（福岡市東区）で発見された金印は、『後漢書』『倭伝』の印綬に該当する。弥生中期後半の倭人は、「漢帝国の周縁部の種族」であり、朝貢国の域を出なかった。一方金印下賜は、「東夷の外臣」として皇帝を頂点とする秩序に組み入れられたという点で画期である。

4 東アジアにおける弥生後期の墓制

2・3世紀代に吉備、出雲、伯耆、丹後、東海など各地で造営された大型墳丘墓は、平野や水系を単位とする盟主の誕生を示唆している。それら大型墳丘墓は、同時期の北部九州の有力層墓を凌駕する規模といわれる。しかし北部九州では、吉野ヶ里や吉武樋渡の墳丘墓のように前2～1世紀代（Ⅱ期後半からⅣ期）に、大型墳丘墓（区画墓）の段階を経ていることを忘れてはならない（図1）。

『魏志倭人伝』の「其死有棺無槨、封土作冢」その遺体に棺はあるが槨はなく、盛土をして塚をつくる、という記述は、棺や副葬品をおさめるための「槨」をもたない倭人の墓制を貶めているのではなく、薄葬が尊ばれた三国時代の風潮の中で倭の墓制を高く評価したものとされる（渡邊 2012）。後漢鏡が集中する弥生後期の有力層墓は、「イト」の井原縄溝と平原1号墓が傑出し、その間をうめる有力層墓は三雲・井原遺跡群で継続的に造営された。「イト」における後期の有力層墓は、埋葬主体に銅鏡を集中副葬するが区画墓の規模は抑えられている点で、倭人伝の記述とも矛盾しない。

まとめ

金印『漢委奴国王』の印文と『魏志』に登場する「奴国」、文字は同じだが、そこには2世紀近い時間的な隔たりがある。1世紀代に金印を入手したのは「倭奴国」（富谷 2012）で、制海権を考慮すれば壱岐・対馬から五島までの島嶼を含む北部九州である。その中心は、青銅器やガラス製品の工房址が集中する福岡平野の「ナ」と厚層墓が分布する糸島地域の「イト」と考えられる。両者は役割を補完しながら外交や生産の中核として機能したのであろう。

2 世紀後半の「倭国大乱」を経て、3 世紀前半になると「倭王」卑弥呼による機構の再編が行われた。北部九州は、女王国からおくられた大率によって分断・解体された。『魏志』に登場する「奴国」が1 世紀代に「倭奴国」を構成した「ナ」に相当することは、V 期後半の墓制と副葬遺物の傾向から類推されるのである。

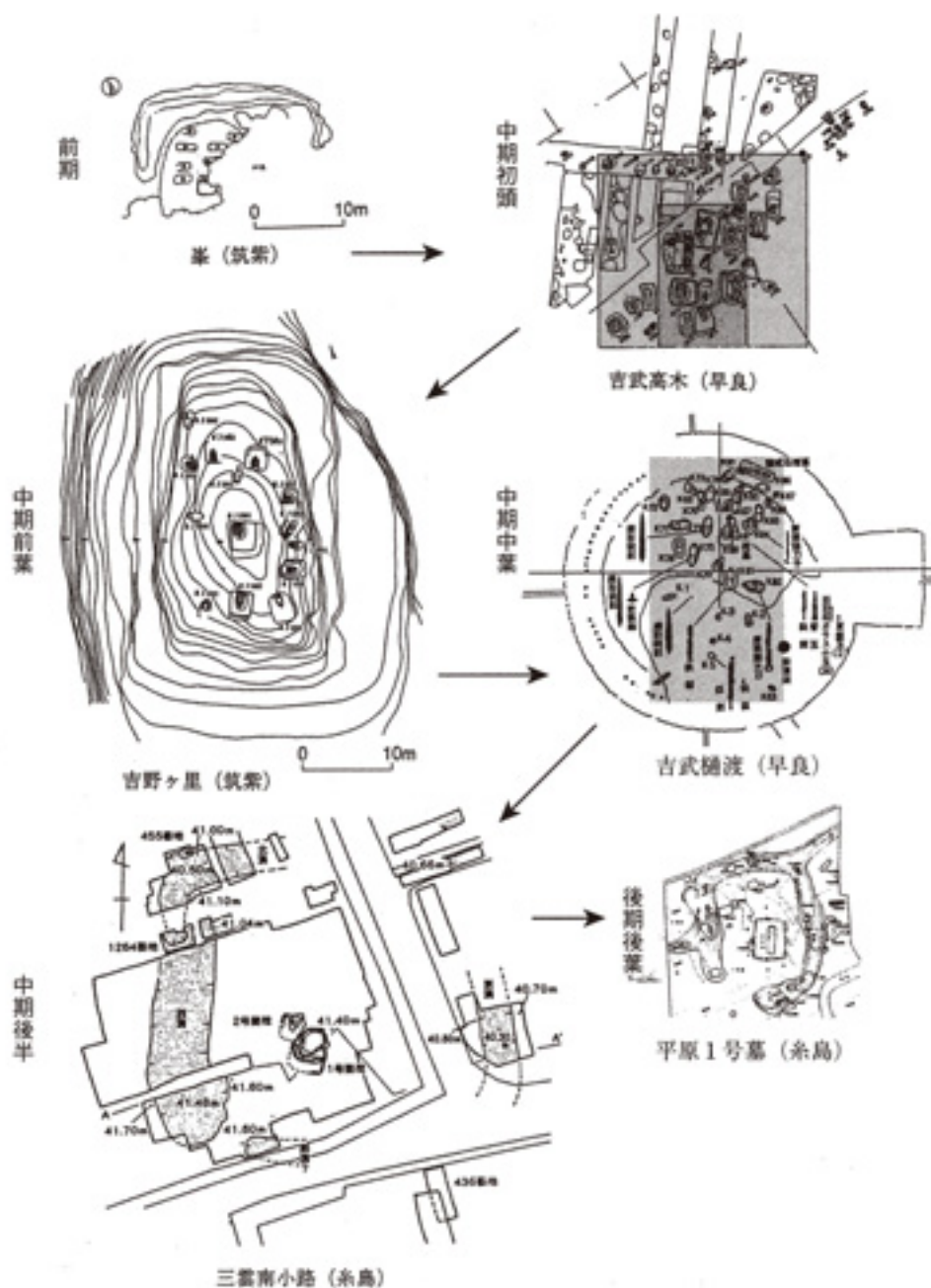
【引用・参考文献】

小池史哲（編）2010「甕棺墓遺跡 日本編」『東アジアの甕棺墓』国立羅州文化財研究所

常松幹雄 2011「墓と副葬品の変貌」『弥生時代の考古学』3、同成社

富谷 至 2012「四字熟語の中国史」岩波新書 1352

渡邊義浩 2012『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書 2164



第1図 北部九州における区画墓の変遷

山陰地方における弥生時代の墓制～弥生時代後期を中心に～

松井 潔（財団法人鳥取県教育文化財団調査室）

山陰地方の墳丘墓の特性（表）

山陰地方の墳丘墓の特性は、四隅突出型墳丘墓は通時的には全体の半数弱だが、出雲地域で王墓と呼ぶに相応しい大型の四隅突出型墳丘墓が築造され始める 5 期以降に限ると約 6 割を占める。即ち、「山陰地方の墳墓＝四隅突出型墳丘墓」という概念は 5 期以降にこそ相応しいといえよう。また、大型の墳丘墓は潟湖を見下ろす立地が多いのも大きな特徴である。

因幡 E 地域では、C 地域では認められない重層的な首長墓の系列を辿ることができることが大きな特徴である。また、B 地域と D 地域の墳丘墓群で築造方法、埋葬施設上への土器破碎供献等、北近畿の墓制との親縁性が認められることも特徴である。

伯耆東部 F 地域と H 地域の墳丘墓は、①両地域とも 4 期までは原則として四隅突出型墳丘墓だが、5 期に平面方形の墳丘墓に転換、②H 地域では墳丘墓の主体部に副葬品を伴わないが、F 地域では多量の玉類や鉄製品が出土、という差異が認められるのが特徴である。F 地域がこうした多彩、多量の副葬品をもつ理由の手がかりが棺形式にある。少なくとも三主体で用いられた舟底形木棺は丹後の首長墓で採用される棺形式なので、北近畿の有力首長と親縁な関係を持っていたことが窺われる。

伯耆西部 伯耆西部では L 地域と M 地域で多くの墳丘墓が築かれる。特性は、①M 地域の洞ノ原墳丘墓群では中期末にあたる 1 期に突出部の未発達な四隅突出型墳丘墓が出現、備後系の供献土器が出土するので、山間地から沿岸部への四隅突出型墳丘墓の拡散に際して日野川が経路となったとみてよい点、②L 地域と M 地域の墳丘墓には高地性の環壕集落が隣接する立地において共通性があり、この地域では集団間の緊張関係を契機に首長への一層の権力集中が進行していたことを窺わせる点、③四隅突出型墳丘墓が墳丘墓の形式としては継続せず、概ね 3 期ないし 4 期を境に（長）方形プランの墳丘墓に変化する点があげられる。

出雲東部 能義平野では、飯梨川下流左岸の独立丘陵や尾根上に、5 期以降の大型の四隅突出型墳丘墓が累代的に築造される一方、伯太川流域では、独立山塊の城山や丘陵上を中心に 2 期以降の平面形態が方形、不定形で小規模な墳丘墓等が築造される。前者の地域での大型の四隅突出型墳丘墓の築造開始を能義平野の地域集団における階層社会の顕在化の結果と考ええると、従来の墓域である後者の地域から四隅突出型墳丘墓の立地を分離することで、権力の隔絶化を図ったのではないかと考える。

出雲西部 出雲西部でも 5 期以降、簸川平野を眼下に望む西谷丘陵上に大型の四隅突出型墳丘墓が累代的に築造される。うち西谷 3 号墓（5 期）は、埋葬施設の構造、副葬品及び供献土器の質、量で他の墳丘墓を圧倒する。供献土器には北近畿系の土器が一定量含まれる上、第 4 主体の供献土器の中や墳丘の周辺からは、特殊器台、特殊壺の破片も相当量見つかっている。

一方、丘陵下の簸川平野では、沿岸部最古の四隅突出型墳丘墓、青木 4 号墓を起点に青木遺跡、中野美保遺跡で小規模な四隅突出型墳丘墓が後期後葉まで継続的に築造される。山陰地域の中では唯一この地域だけが、四隅突出型墳丘墓を一貫して築造し続ける中で後期中葉以降階層性が顕在化し、王墓たる属性を備えた四隅突出型墳丘墓が丘陵上に隔絶化された。

なお、研究集会で報告した弥生後期墓制の階層性については、紙幅の都合で図を掲載するにとどめ本文は割愛する。

近畿北部の弥生墓制

肥後 弘幸（京都府教育委員会）

1 はじめに

近畿北部は、旧国の丹後、但馬及び北丹波、兵庫丹波の地域にあたる。この地域はもとは、「タニハ」もしくは「タニワ」と呼ばれた地域で、丹後という国名は登場するのは、713（和銅6）年の丹波分国からである。分国以前の丹波の中心は丹後にあったようで、倭名類聚抄に記された丹波郡は現在の京丹後市峰山町及び大宮町にあたると推定される。この地域では非常に多くの墳墓が調査され、その変遷が明らかになっている。

2 多様な中期の墳墓

弥生時代前期末の墳墓が山の上から2つ見つかっている。前期末から中期初頭にかけての二重環濠をもつ高地性集落として著名な扇谷遺跡と谷を挟んだ丘陵上に七尾遺跡があり、2基の方形台状墓が検出された。豊岡市駄坂舟隠遺跡では、眼下に前期末から中期初頭の川原遺跡のある丘陵頂部から同時期の方形周溝墓8基が見つかっている。平地の少ないこの地域の特徴を示すのか台状墓と方形周溝墓という形態の差はあるものの丘陵の上に築かれたという共通点がある。

中期になると台状墓、方形周溝墓に加えて円形周溝墓及び方形貼石墓の4種類の墓が存在する（第1図）。中期中葉以降、墓域はいずれも集落に隣接して築かれている。京丹後市奈具・奈具岡遺跡群では、3つの居住域、2つの工房、2つの墓域そして水田域の関係が明らかになっている。2つの墓域は、いずれもムラの有力者の墓と考えられ、ムラ奥部にまず3基の20×10mの長方形台状墓（周溝墓）が営まれ、7人+7人+2人埋葬されている。その後、ムラの入り口には、2基の方形貼石墓が築かれるようだ（第2図）。舞鶴市志高遺跡では、中期中葉から居住域の西側に方形周溝墓群が営まれはじめ、中期の後葉も方形周溝墓は造営されるが、あわせてムラの東側に川を挟んで方形貼石墓群が営まれる。後期初頭になるとムラは小さくなり、墓域は丘陵の上に移動している（第3図）。

さまざまな墓制の中でその頂点にあるのが方形貼石墓である。近畿北部では、8遺跡13例を数えるが、拠点集落に伴う例が多い。日吉ヶ丘遺跡（第4図中）と寺岡遺跡（同左）の方形貼石墓は、同規模で長辺32m前後・短辺20m前後と弥生時代中期の墳墓としては全国的には吉野ヶ里北墳丘墓に次ぐ規模である。前者には埋葬施設1つのみが設けられ677点以上の碧玉管玉が出土した。後者には、大小3基の埋葬施設が営まれていた。

3 近畿北部の後期の墓制

方形貼石墓を頂点とした多様な墓制を持っていた近畿北部であるが、後期に入ると新たな「台状墓の墓制」が誕生している。近畿北部の中期の大きなムラはいずれも後期にまで続かず、後期の集落様相は明らかでない。一方、墓域は集落から離れ、山の上に営まれるがその様相は中期とは全く異なり、斉一性が高く近畿北部に広く分布する（第5図）。後期の墓制の特徴は、次の4つである。まず、第1は、居住域から離れた丘陵上に墳丘の区画の明瞭でない台状墓を築いていることである。第2の特徴は墳丘内に大小多数の埋葬施設があることである。付表は、後期前葉の墳墓群を抽出し、成人、若年、乳幼児の比率を求めたものである。各墳墓群で微妙に構成に違いがあるが、総数150の埋葬施設に対して、成人が71、小児・青年が17、乳幼児が41である。乳幼児の死亡率が高い未開社会としては、平均的な年齢構成と考えられ、親族墓と考えられる。第3の特徴は墓域内破碎土器供献と呼ばれる土器供献儀礼が徹底して実施されていることである。その分布範囲こそが近畿北部の勢力範囲であり、高槻市古曽部遺跡、福井市小羽山墳墓群、長岡市屋鋪塚遺跡など遠方にも知られる（第9図）。第4

の特徴はガラス勾玉・小玉などからなる装身具と鉄製武器・工具類を副葬することである。

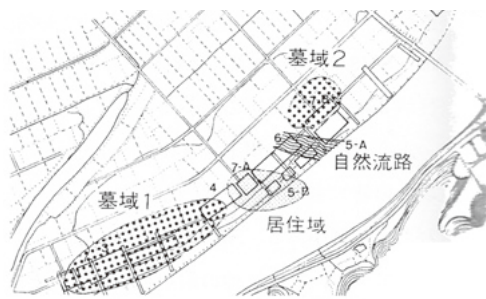
そしてこの墓制の中には、副葬品豊かな王墓の存在が明らかになっている。この墓制を始めた三坂神社3号墓（第6図）、ガラス釦・銅釦13・鉄剣11振りなど多数の副葬品をもつ大風呂南1号墓（第7図）、東西36、南北39m、高さ4mを測る巨大な方形墳丘を持つ赤坂今井墳墓（第8図）は、大陸との交易で栄えた近畿北部の歴代の王の墓と考えられる。



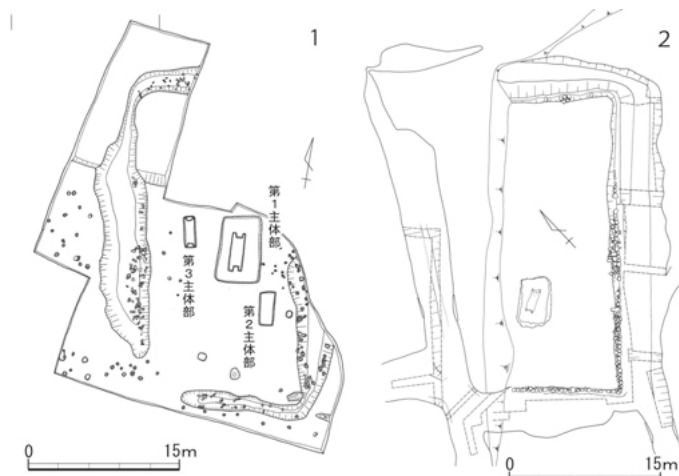
第1図 前期～中期のさまざまな墓制の分布



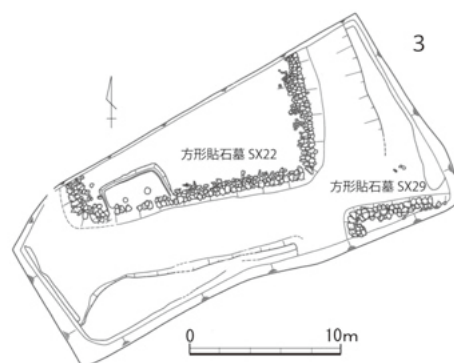
第2図 奈具・奈具岡遺跡群の集落構造



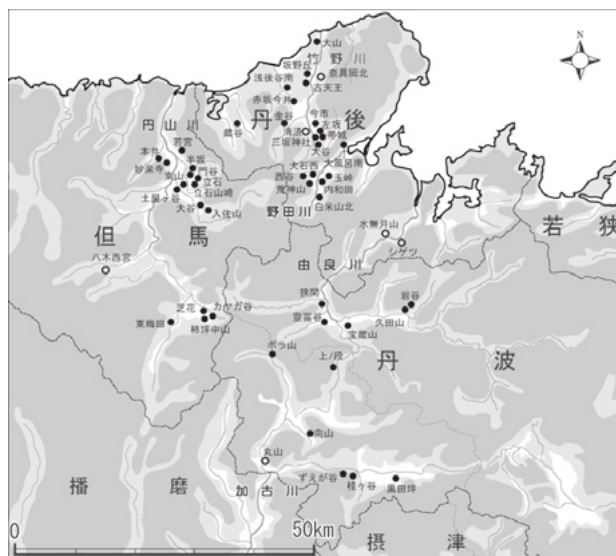
第3図 志高遺跡の居住域と墓域の変遷
上：中期中葉、中：中期後葉、下：後期初頭



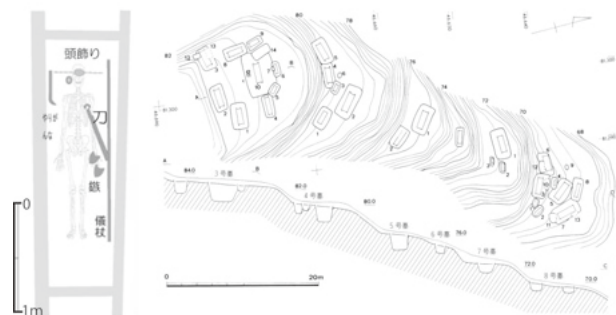
第4図 近畿北部の主要な方形貼石墓



1 寺岡遺跡 SX56 2 日吉ヶ丘遺跡 SZ01 3 難波野遺跡



第5図 近畿北部の弥生時代後期の墳墓

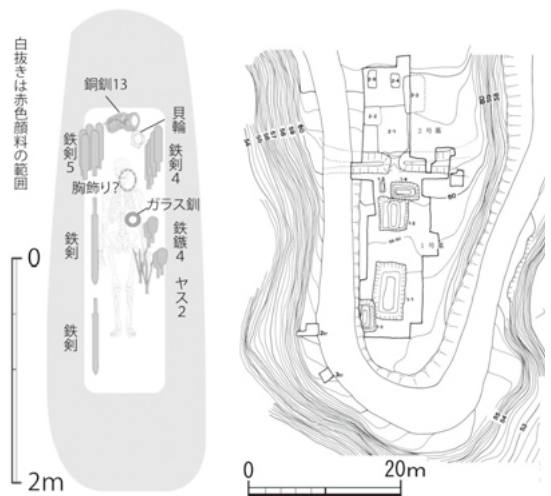


第6図 京丹後市三坂神社墳墓群と3号墓第10主体部

	乳幼児					小児・若年		成人		合計 埋葬施設数
	土器棺	土槨墓 (~1.2m)	木棺墓 (1.2~1.7m)	小計	割合	木棺墓 (1.2~1.7m)	割合	木棺墓 (1.7~2.8m)	割合	
三坂神社墳墓群	4	0	12	16	41%	5	13%	18	46%	39
左坂墳墓群	0	6	14	20	51%	2	5%	17	44%	39
今市墳墓群	1	0	11	12	38%	6	19%	14	43%	32
東山墳墓群	0	1	13	14	35%	4	10%	22	55%	40
合 計	5	7	50	62	41%	17	11%	71	47%	150

備考 左坂墳墓群については、京都府教育委員会調査分のみを扱った。
東山墳墓群については、木棺規模を不明とする埋葬施設7期について、墓壙規模から木棺規模を想定した。

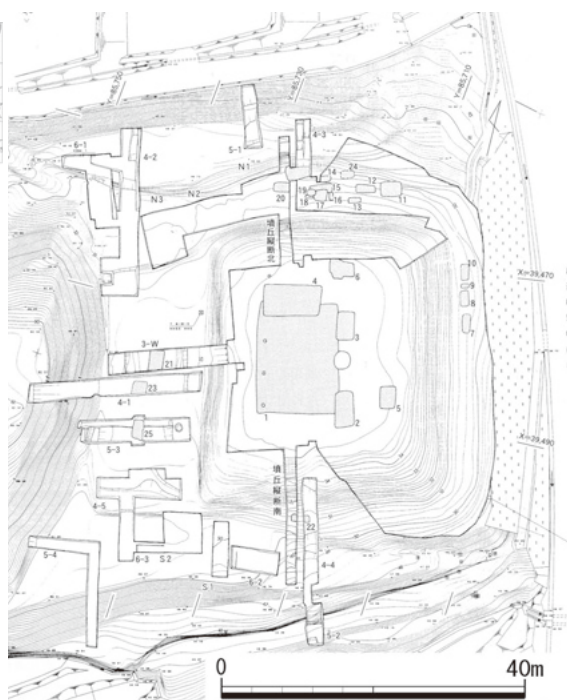
付表 近畿北部の主要な後期前葉の墳墓群の被葬者



第7図 与謝野町大風呂南墳墓群と1号墓第1主体部



第9図 墓壙内破碎土器供献をする後期の墳墓



第8図 京丹後市赤坂今井墳墓

福井県における弥生時代の墓

前田 清彦（鯖江市教育委員会）

1 墓制の変遷

（１）弥生時代中期の様相

方形周溝墓の波及（第１・２・３図）

方形周溝墓の出現は弥生時代中期前葉ないし中葉で、中期後葉から遺跡数が増加するが、この時期に形成された墓域は弥生時代後期にまで長期継続する場合が多い。周溝墓の規模は一辺10m程度が普通である。墓域構成では、周溝墓群が多数密集して検出された遺跡（小浜市府中石田遺跡など）と、各周溝墓が散在的に検出された遺跡（福井市今市岩畑遺跡など）の二者がある。

丘陵上の墳墓（第４図）

弥生時代中期後葉になると、居住域から離れた丘陵上に墳墓が造られる。鯖江市王山40号墓（26×27m）のように大型の方形墳墓もあるが、四周に周溝を巡らす方形周溝墓の構築方法を踏襲するものや、丘陵を削り出して方形墳丘を形成する墳墓、丘陵尾根を深い溝で分断し、斜面側を削り出して整形する墳墓がある。後二者をいわゆる「方形台状墓」と分類することも可能であるが、「丘陵上に造られた方形周溝墓」との区別は困難である（前田 2004）。

（２）弥生時代後期の様相

側面を整形しない台状墓

弥生時代後期後半も一辺10～15m程度の方形周溝墓・台状墓が一般的であるが、この段階に造墓を始めた墓域はそのほとんどが丘陵上にある。また、丹後地域で盛行した、墓坑を掘り込む平坦面のみを整形し墳丘部分を整形しない所謂「卓状墓」（福島 2003）が若狭地域において出現する（小浜市木崎山遺跡など）。

四隅突出型墳丘墓

越前地域では山陰系墳墓の「四隅突出型墳丘墓」が出現する。福井市小羽山30号墓（主丘部26×22m）・同26号墓（主丘部27×20m）はこの段階の最大規模の墳墓で、いずれも貼石・列石は無く、短小な突出部を持ち、およそ50～70個体分の祭祀土器を墓坑上に集積している。貼石・列石を欠く以外は山陰地方の四隅突出型墳丘墓における葬儀形式をほぼ忠実に再現していると評価してよい。四隅突出型墳丘墓は、若狭地域では現在のところ検出例はない。

（３）弥生時代終末期の様相

方形の大型墳墓（第５図）

弥生時代終末期も一辺10～15mの方形周溝墓・台状墓を中心とするが、大型墓では方形墓の方に類例が目立つ（福井市原目山墳墓群・永平寺町乃木山墳丘墓・南春日山1号墓）。これらはいずれも越前地域の、丘陵上に造営された台状墓に限られ、特に南春日山1号墓は43×37mという日本海側でも最大級の規模を有する。一方、四隅突出型墳丘墓も造営されるが、福井市高柳2号墓は主丘部7×6m前後と小規模である。また、終末期の後葉には前方後方墳が認められるが（福井市中角1号墓）、短小な前方部を有する全長20mの小規模な墳墓である。

2 被葬者と社会集団

方形周溝墓の墓域形成は、墓域の継続期間と墓域造営に参画した造墓集団の規模が、周溝墓造営数と墓地景観に反映されていると考えられる。墳墓の墳丘規模については、弥生時代中期中葉までは相対的であるが、中期後葉に丘陵上に出現した大型方形墓（太田山1・2号墓、王山40号墓）では他を

圧倒する規模を有する。しかし、その被葬者は階層的関係から抽出された人物ではなく、モニュメント的な意味を含む墳墓と想定される（御嶽 2011）。

墓坑数は1基を基本とするが、弥生時代後期後半～終末期においては、多葬墓の事例が認められ、墳丘規模が大型のものに認められる。原目山2号墓・小羽山26号墓などのように埋葬施設・副葬品において優れた内容をもつ墳墓もあり、被葬者たちの社会的位置関係を反映している。

埋葬施設は組合式箱形木棺が主体であり、木棺を持たない土坑墓もまた多い。木棺規模は長さ2m前後が主体である。弥生時代後期後半になるとこの状況が一変し、小羽山26号墓第1埋葬施設のような重厚な埋葬施設の事例が増加する。いずれも墳丘規模や副葬品などで優れた内容を有する。一方、弥生時代中期後葉から所謂「刳拔木棺」が散見されるが、丸木舟等からの転用棺が多いと推定され、長さも2m前後と組合式箱形木棺と変わるものではない。

副葬品を持つものは碧玉製管玉を中心に玉類が多く、副葬品というより装着状態で埋葬されたことを示している。弥生時代中期後葉の太田山2号墓を嚆矢として「玉の大量副葬」が認められ、弥生時代を通じて越前地域の大型墳墓の中心被葬者に認められる。これらについては、「頭飾り」（仁木 2007）のような頭部装身具の可能性が高い。なお、確実な墳墓遺構ではないが（不時発見遺物）、鯖江市西山公園遺跡から弥生時代後期前半と推定される有鉤銅釦9点が出土しており、墳墓副葬品であった可能性がある。

3 墓制の地域間交流

卓状墓と墓壙内破碎土器供献

丹後地域に盛行した「卓状墓」は若狭地域のみで検出されている。一方、「墓壙内破碎土器供献」は若狭・越前両地域で近年確認事例が増加しており、府中石田遺跡SX7など6墳墓が挙げられる。「卓状墓」の埋葬施設もあり、活発な人的交流の足跡と考えられる。

四隅突出型墳丘墓

現時点では小羽山墳墓群の8基と高柳2号墓の1基が知られ、そのすべてが貼石・列石を持たない点で、その造営に際しては越前の主体性を認め得る。弥生時代後期後半においては越前地域の有力墳墓として評価しうるが（小羽山30・26号）、終末期以降はむしろ方形墓に優れたものがあり、越前地域における首長墓クラスの墳墓形態としては継続していかないようだ。

【参考文献】

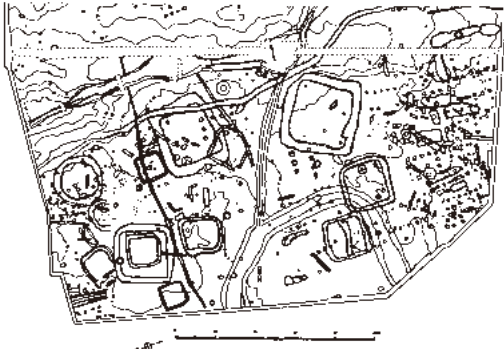
- 仁木 聡 2007「山陰の弥生墓と副葬された玉製品－頭飾を中心にして－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 福島孝行 2003「いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討」『弥生時代の墳墓と祭祀』京都府埋蔵文化財研究会
- 前田清彦 2004「越前・若狭の弥生墳墓」『台状墓の世界』但馬考古学研究会
- 御嶽貞義 2011「コシの弥生墓制」『日本海側の弥生墓制』福井県鯖江市教育委員会

時代区分			若狭(※含む敦賀)		越前	
					南部(南越盆地)	北部(福井平野・奥越)
弥生時代中期	前葉	Ⅱ様式 木柵式	古河20			
	中葉	Ⅲ様式 小松式	府中石田62		瓜生助3 瓜生助5	今市岩畑 上河北 別所
	後葉	Ⅳ様式 戸水C式	府中石田33 府中石田22	吉河7 向山B	横枕 王山40	太田山2 小羽山3 中角20
弥生時代後期	前半	Ⅴ様式前半 猫橋式	吉河9		王山1	山ヶ鼻
	後半	Ⅴ様式後半 法仏Ⅰ式 法仏Ⅱ式	田島元山	三ツ売 王山3	太田山6	小羽山50 小羽山40 小羽山26
			府中石田1 木崎山	西山1 盆山	長屋 中角35 南春日山1 小羽山24	小羽山50 小羽山26 片山島越5
弥生時代終末期	前葉	Ⅵ様式 月影Ⅰ式			王山5 下山 中角15	三尾野 抽高林1 高柳 原目山1 原目山2
	中葉	Ⅵ様式 月影Ⅱ式	府中石田47 舞崎	天神山	長屋 原目山3 中角6 中角1	抽高林1 高柳 原目山1 原目山2
	後葉	Ⅵ様式 白江式			岩内山 小輪津(安保山1)	
古墳時代前期	前半	Ⅶ様式 布留前半			王山25 戸板山 長泉寺山 松明山2	

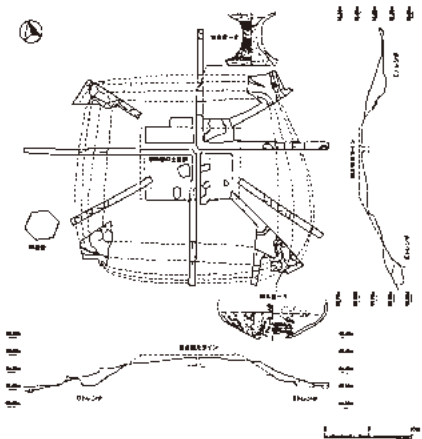
第1図 主要墳墓編年図



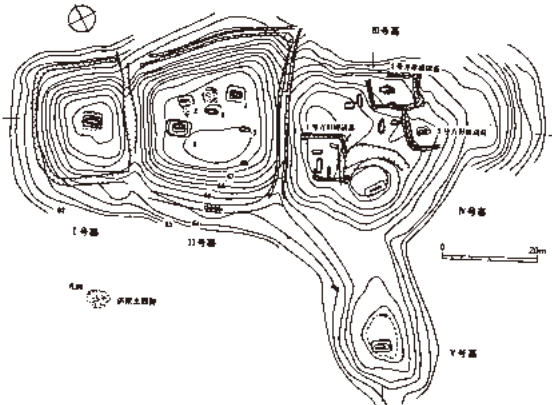
第2図 小浜市府中石田遺跡(部分)



第3図 福井市今市岩畑遺跡



第4図 鯖江市王山40号墓



第5図 福井市原目山墳墓群

加賀地域における弥生時代の墓制について

下濱 貴子（小松市埋蔵文化財センター）

はじめに ～対象地域と時期区分について～

加賀地域における墓制の研究は、古くから金沢市七ツ塚墳墓群の例が知られている。加えて、平成に入り金沢市西念南新保遺跡や白山市旭遺跡群、小松市八日市地方遺跡の例から、およそその出現と展開の把握へと繋がっている。また、木棺遺存の好例はないものの、墓壙に残る痕跡を基に、木棺形式や主体部法量からの成果（前田 1998）が発表されている。報告対象地域は、主に手取扇状地及び南加賀地域を対象としている。時期区分は、細分可能な限り、前期（Ⅰ）、中期前葉（Ⅱ）、中期中葉（Ⅲ）、中期後葉（Ⅳ）、後期前半（Ⅴ前半）、後期後半（Ⅴ後半）、庄内式前半（Ⅵ）として表記している。

1 墓制の変遷と分布

（1）墓制の変遷

縄文晩期から継続する土器棺墓はⅠ期まで継続しており、Ⅱ期の墓制に関しては不明瞭である。ただ、金沢市矢木ジワリ遺跡や八日市地方遺跡における土壙墓の可能性があげられる。方形周溝墓の出現はⅢ期前半がもっとも古い。およそ櫛描文波及とともに展開する環濠集落との形成と連動するものと考えている。その後、小松式土器の展開とともにⅢ期後半頃には、加賀地域内に普及するものと思われる。また、この地域に特徴的なものとして、Ⅲ期からⅣ期にかけて、住居に近接する形で土壙墓（木棺墓）が展開する傾向がみられる。大規模環濠集落の解体がみられるⅣ期には南加賀地域における例はみられないが、おそらく、低地から台地、丘陵上への集落の展開とともに、台状墓の造成を想定している。また、Ⅵ期には、旭遺跡群内から四隅突出型墳丘墓の出現や西山墳墓群、寺井山墳墓群など、突出した墓がみられるようになる。

（2）立地と分布

手取扇状地から梯川流域にかけては、集落が確認されている数に比べると墓域の確認が非常に少ないのが現状である。縄文晩期から継続する遺跡では、弥生時代前期前半まで土器棺墓がみられる。沖積低地に河川志向集落が成立する農耕主体の生業へと移行する弥生時代中期には、集落に隣接して墓域が営まれている（集落型墓域）が、Ⅴ期以降になると、加えて居住域から分離して墓域を形成する（集落外型墓域）もみられるようになる。

2 方形周溝墓を中心とした造営のあり方

（1）墓の規模と形態

八日市地方遺跡では、Ⅲ期からⅣ期の継続した方形周溝墓の造墓が確認でき、居住域と墓域のセットが複数みられる。規模は、6m～14mほどで、集落外縁部から大型の墓を核として造営。形態は、四隅切れのものから、環濠の溝間の高まりを利用して直交する溝をきることで営まれるあり方や、陸橋部を1つから3つ設けるもの、全周するものまでみられる。大型のものは長方形を呈する。その他のⅣ期にみられる猫橋遺跡や上安原遺跡でもおよそ同様である。Ⅴ期からⅥ期には四隅切れが卓越する。規模は20mを超えるものから6m前後のものと明瞭な格差がみられるようになる。

（2）主体部の様相

方形周溝墓の主体部は、弥生時代中期段階（Ⅲ～Ⅳ期）は墳丘上は単数埋葬であり、Ⅴ期以降は、複数埋葬もみられるようになり、墳丘上での中心埋葬の意識も明瞭になる。主体部の種類は、木棺墓、素掘りの土壙墓がみられ、胎児、小児棺にあたる土器棺は、墳丘上には現在のところ確認できない。

方形周溝墓内の木棺埋葬

木棺墓は、木材遺存例は少なく、八日市地方遺跡の小口のみであるが、掘込痕跡や詳細な土層観察により、Ⅲ期にはⅠ-a型、Ⅱ型、Ⅲ型とも確認できる。Ⅳ期は、当該地域では良好な資料に恵まれていないが、同時期の県内の資料をみる限り、Ⅰ-a型、Ⅱ型がみられ、Ⅲ期の様相が継続するものと思われる。Ⅴ期以降には、Ⅰ-a型はⅡ型に比べ、優位性が述べられている（前田 1998）。

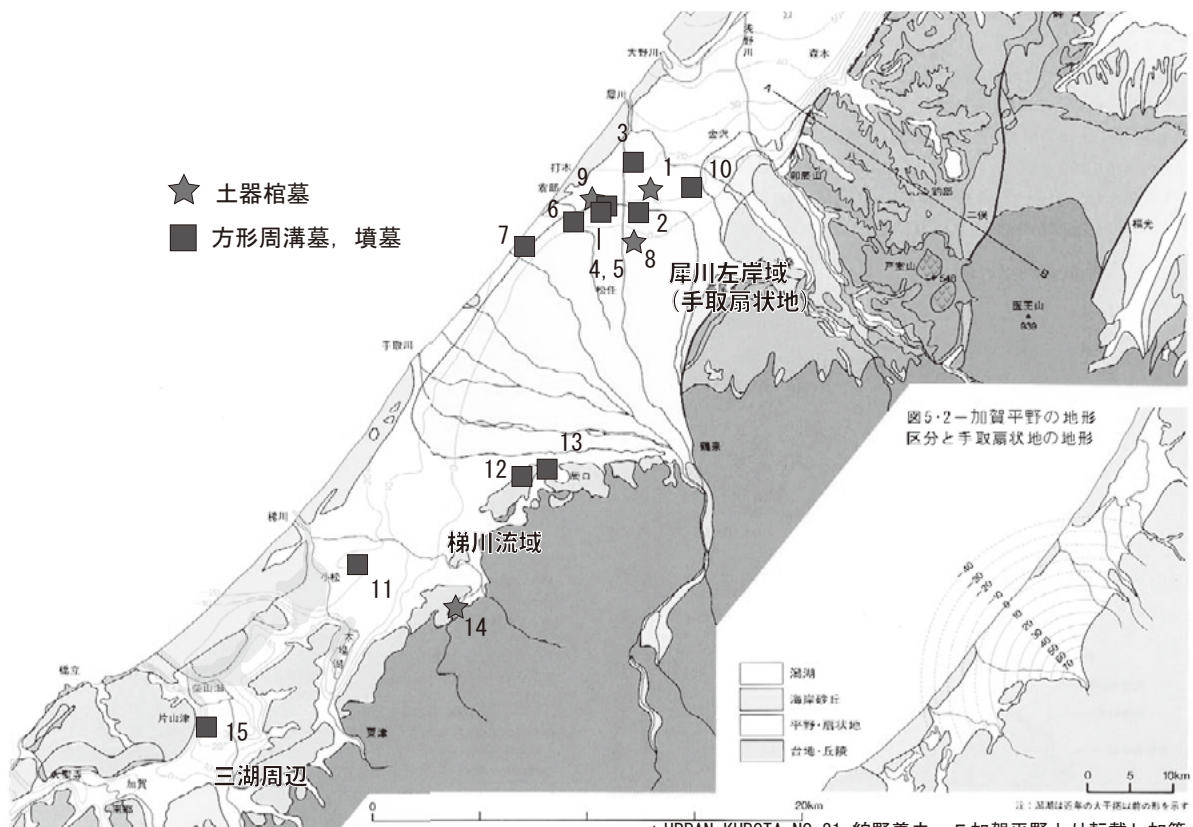
人骨の遺存は悪く、埋葬姿勢がわかる例はないが、墓壇法量から、成人、小人のおおよその判断はできるものとしてみていくと、Ⅴ期以降には、複数埋葬とともに小人も墳丘内に葬られる様相が見受けられる。

（3）副葬品

方形周溝墓主体部、木棺墓には、Ⅲ期からⅣ期にかけては、着装品と想定する管玉が複数みられる。Ⅵ期以降は、鉄製品（剣、刀、鏃）などが加わり、朱の撒布も確認できるものもみられるようになる。

参考文献

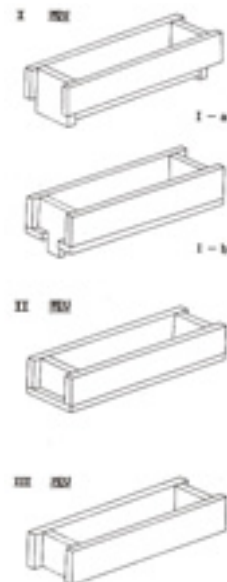
- 福永伸哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究 第32巻第1号』考古学研究会
福海貴子 2005「小松市八日市地方遺跡」『石川考古学研究会々誌 第48号』石川考古学研究会
福海貴子 2006「石川における墓と集落の位置関係」第12回例会要旨集中部弥生時代研究会
古川 登 2002「日本海地域における弥生集団墓の様相」『考古学ジャーナル 484』
布尾和史・安 英樹 2005「縄文晩期から弥生中期の遺跡群の変遷～手取扇状地遺跡群の検討から～」『第4回考古学研究会東海例会 縄文晩期～弥生中期の地域社会の変容過程』第4回考古学研究会東海例会事務局
前田清彦 1999「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会
松任市教育委員会 1995『旭遺跡群Ⅰ』
松任市教育委員会 1995『松任市野本遺跡』



群	No.	遺跡名	属性	下野	I	II	III	IV	V	VI
手取扇状地	1	御経塚	集落 (土器棺墓)							
		御経塚シンデン								
		御経塚オッソ								
		チカモリ								
		新保本町西								
		矢木ヒガシウラ								
		矢木ジワリ								
	2	二日市イシバチ	集落 (方形周溝墓)							
		長池ニシタンボ								
		三日市A								
		横江古屋敷								
		横江E.C								
		末松廃寺								
		七原町B								
		上荒屋								
	3	上安原	集落 (方形周溝墓)							
	4	横江荘(西)	集落 (方形周溝墓)							
	5	横江A	集落 (方形周溝墓)							
		横江荘(東)								
		中屋サワ								
		中屋ヘシタ								
		専光寺養魚場								
		佐奇森								
		八田中ヒエンモンダ								
		下安原								
		下安原海岸								
		八田中								
	6	旭遺跡群	集落 (方形周溝墓)							
		宮永坊の森								
		宮永市								
		宮永市カイリョウ								
		宮永市カキノキバタケ								
		倉部出戸								
		浜竹松								
		北安田北								
		宮保光明寺								
		相川新								
		中相川								
		東相川								
		東相川B								
		東相川D								
		竹松E.C								
		平木A,B,D								
	7	野本	集落 (木棺墓)							
		徳光ヨノキヤマ								
		法仏(B地区)								
		中村ゴウデン								
手取扇状地	8	乾	集落 (土器棺墓,配石墓)							
		長竹								
	9	中奥・長竹	集落 (土器棺墓)							
		安養寺上林								
		窪二丁目								
		押野タチナカ								
		押野ウマワタリ								
		押野大塚								
		押野西								
		荒屋								
	10	横川・本町	集落 (方形周溝墓)							
		高橋セボネ								
		大額キョウデン								
		扇台								
		額谷								
		額谷ドウシンダ								
	11	八日市地方	集落 (方形周溝墓) (土墳墓)							
		梯川鉄橋								
		平面梯川								
		白江梯川								
		漆町(群)								
		佐々木アサバタケ								
		吉竹								
		八幡								
		千代オオキダ								
		一針B・C								
		大長野A								
		千代デジロA								
		牛島ウハシ								
		和田山下								
	12	西山墳墓群	墳墓							
	13	寺井山墳墓群	墳墓							
		銭畑								
		松梨								
		高堂								
		中庄								
		八里向山								
		河田山								
	14	六橋	集落 (土器棺墓)							
		念仏林南								
		額見町西								
		柴山出村								
		新堀川								
	15	猫橋	集落 (方形周溝墓)							
		弓波								
		島								
		潮津スワンヤブ下								

*手取扇状地は(布尾・安 2005)を基に作成。

I期は長竹式～柴山出村式、II期は矢木ジワリ式、III期は、寺中式～小松式、IV期は磯部式～戸水B式、V期は猫橋式～法仏式、VI期は月影式を概ね示す。
木棺形式は(福永 1985)を参照



能登地域における弥生時代の墓制

林 大智（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

はじめに

弥生時代を象徴する墓制である方形周溝墓は、弥生時代中期中葉に能登地域で受容され、本格的な弥生文化が展開する中期後葉に至り、当地域における墓制の主体を占めるようになった。

本稿では、この方形周溝墓に代表される区画墓と、墳丘や区画施設をもたない土坑・木棺墓を整理することにより、能登・北加賀地域における弥生墓制の特徴とその変遷過程を明示していきたい。

1 区画墓の規模と平面形態の変遷（第1・2図）

方形周溝墓が普及する中期後葉には、長軸5～8mの墳丘規模を有するものが主体となる。長軸10mを超える大型墓は墓群中に1・2基程度存在し、すでに規模的格差を明確に見出せる。墳丘平面形態は長方形を呈するものが多く、周溝形態は東海系譜と推測されるg類を主体に、多数の系統が混在する。

後期前葉～後葉には、台状墓を主体に長軸15mを超える大型墓が出現し、小・中型墓の平面形態は正方形化する傾向が窺える。周溝形態はg類がさらに増加し、a類以外の系統が衰退・消滅する。

墳丘規模の格差が明確になる終末期には、長軸15mを超える大型墓が増加する反面、長軸5m以下の小型墓がほぼ消滅する。周溝形態は引き続きg類が主体を占めるなか、a類が増加する傾向を窺える。

2 区画墓上の埋葬施設数と墳丘規模の関係

中期の方形周溝墓は、埋葬施設を墳丘中央に単数設置するものが圧倒的多数を占める。

後期になると、丘陵上に立地する区画墓で、複数の埋葬施設を設置するものが増加し、なかでも、大型の台状墓で4基以上の多数埋葬が顕著に認められる。一方、低地に立地する方形周溝墓は、中期と同様に墳丘中央の単数埋葬を主体としたものが多く確認できる。

終末期には、再び単数埋葬が増加し、大型の台状墓でも単数埋葬のものが出現する。丘陵上に立地する区画墓では、依然複数埋葬を主体とするが、多数埋葬は大幅に減少する。

3 木棺の規模と副葬頻度の推移（第3図、第1表）

中期の木棺は、Ⅱ型木棺（福永 1985）を主体とし、規模は長軸0.8～1mと1.3～2m程度のまとまりが見出され、前者が小児棺、後者が成人棺に対応する可能性が高い。木棺・墓坑規模ともに、無墳丘の木棺墓が卓越し、副葬品の出現頻度も高い傾向を窺える。

後期にはⅠ型木棺が増加し、中能登町吉田経塚山遺跡で検出したⅠ・Ⅲ型を折衷したような木棺と共に、山陰・北近畿などの日本海沿岸地域からの影響が色濃い。この時期には、副葬品として鉄器やガラス小玉が出現し、区画墓内埋葬施設への副葬も増加するが、無墳丘の土坑・木棺墓と出現頻度は変わらない。木棺規模は長軸1.4m程度を境とするまとまりが存在し、中期と比べて長大化する。

終末期には、再びⅡ型木棺が主体となると共に、刳拔式木棺が顕在化する。刳拔式木棺は台状墓の中心埋葬にほぼ限定的に用いられるため、階層上位の木棺型式と考えられる。木棺の長大化や墓坑の大型化が進展する一方で、長軸1m以下の小規模木棺がほぼ消滅する。副葬品の出現頻度は、区画墓の中心埋葬施設が最も高くなり、鉄製武器の副葬も中心埋葬にほぼ限定される。

4 墳墓の構成と集落・墓域の位置関係（第4・5図）

方形周溝墓が普及する以前の中期前葉～中葉には、居住域と隣接して木棺墓（中期中葉に導入開始）や土坑墓が2・3基程度の単位で墓域を構成するが、中期後葉に至り、この墓域に方形周溝墓が加わる。土坑・木棺墓と方形周溝墓はそれぞれ墓群を形成し、互いの墓群領域は隣接しながらも重複することは少ない。低地の遺跡では、後期に至ってもこのような墓群構成に大きな変化はみられない。

一方、後期前葉～後葉には、集落形成の困難な尾根上に台状墓が出現する。同時期の集落は、丘陵裾部や近接する台地上に営まれており、墳墓とその造営集落の間に距離や高低差が生じ始める。

終末期には、低地でも集落と墓域の乖離が明確になり、両者の間に河川や溝などを挟むことも多い。

おわりに

能登・北加賀地域における弥生時代墓制の整理により、集落と墓域の乖離や、墓域内から大型墓が隔絶化する過程が窺え、後期後葉にその変革期を見出すことができた。この時期は、区画墓墳丘上の多数埋葬、I型木棺の盛行と木棺の長大化、副葬品としてのガラス小玉や鉄製武器の導入など、山陰・北近畿に代表される日本海沿岸地域からの影響が色濃く窺え、これらの地域からもたらされた物資・情報などが、能登・北加賀地域で墓制変遷の画期を引き起こす大きな要因となったことを推測できる。

【引用・参考文献】

高橋浩二 2009「北陸における弥生墓制」『中部の弥生時代研究』 中部の弥生時代研究刊行委員会

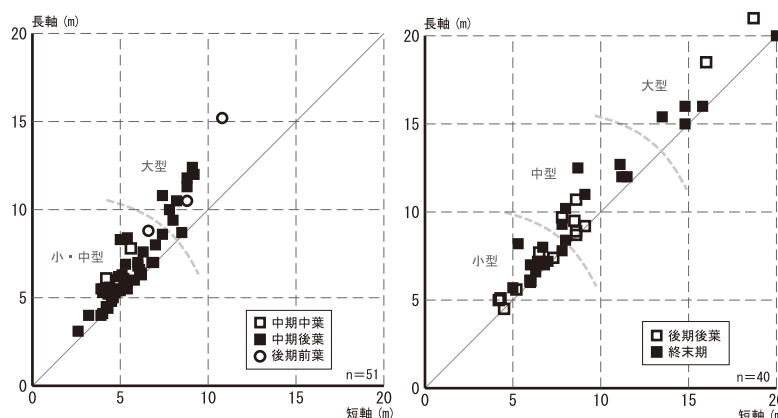
戸谷邦隆・永井三郎 2010『七野墳墓群発掘調査報告書』 七野古墳発掘調査会

土肥富士夫ほか 1982『細口源田山遺跡』 七尾市教育委員会

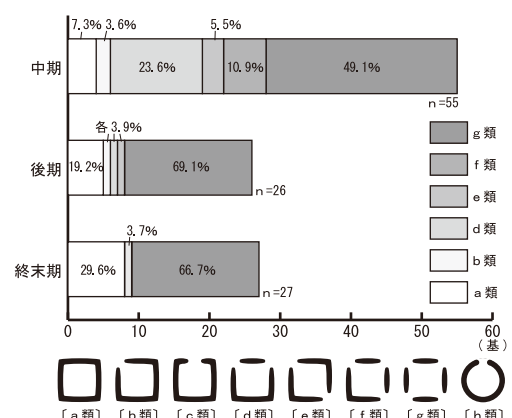
福永伸哉 1985「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会

前田清彦 1991「方形周溝墓平面形態考」『古代文化』vol.43 財団法人古代学協会

前田清彦 1999「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学Ⅲ』 石川考古学研究会



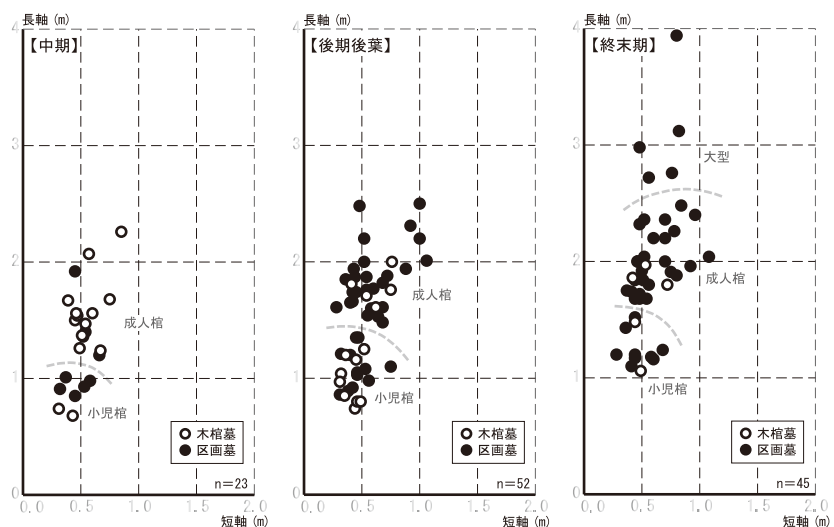
第1図 方形周溝墓と台状墓の墳丘規模



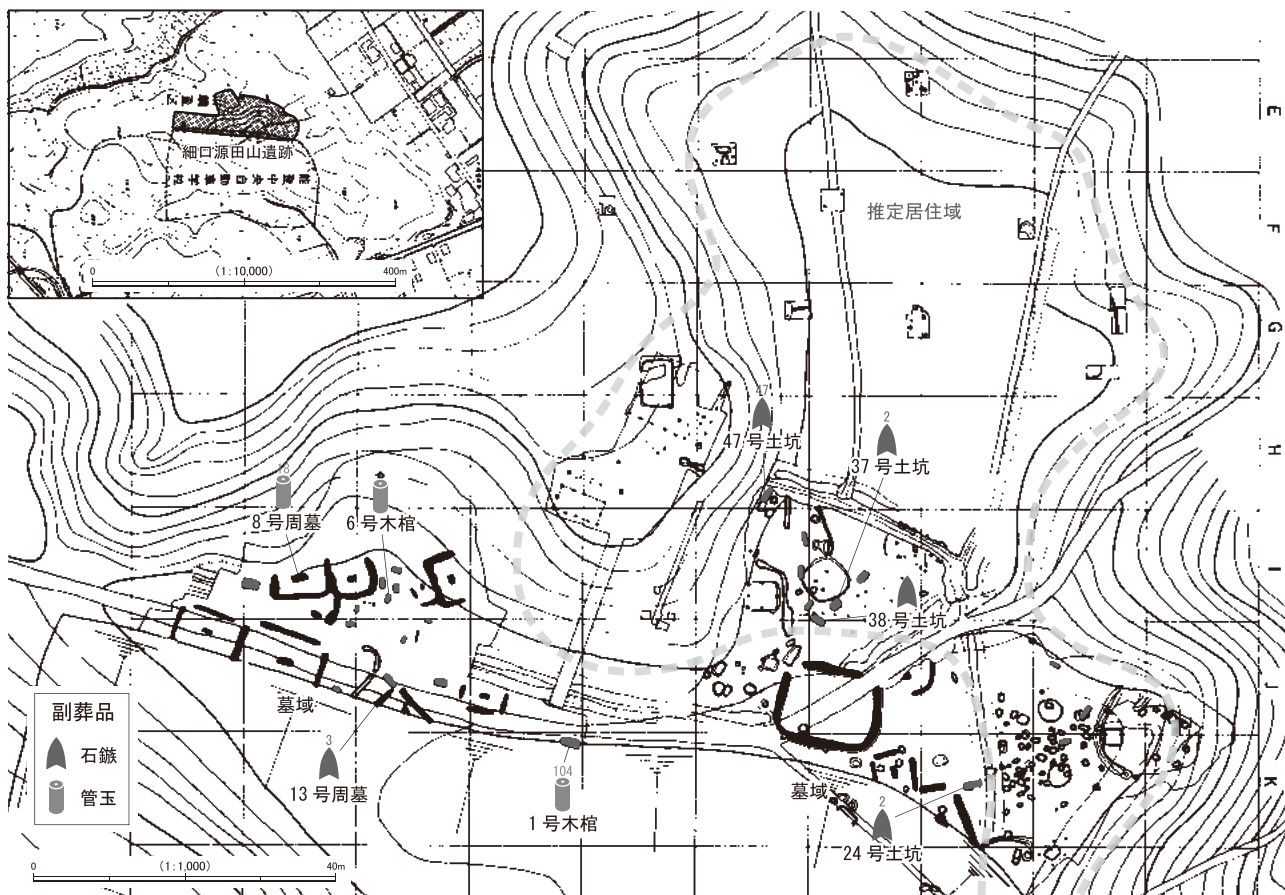
第2図 周溝墓平面形態の変遷

第1表 埋葬施設の副葬品出現頻度

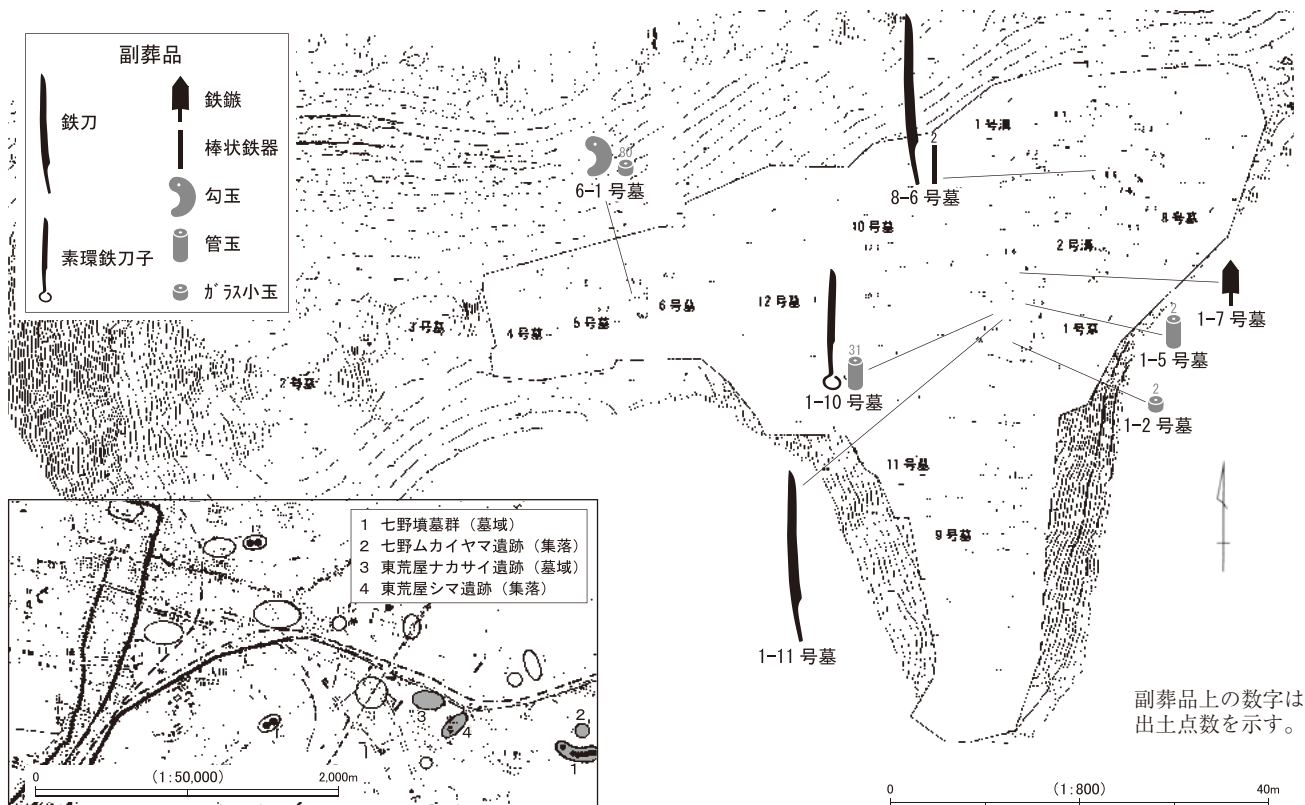
【中期】					
墳墓種別	埋葬施設	総数	副葬	出現頻度	主な副葬品
区画墓	土坑墓	12	0	0%	
	木棺墓	11	2	18.2%	管玉、石鏃
単独	土坑墓	43	13	30.2%	管玉、石鏃
	木棺墓	15	4	26.7%	管玉、石鏃
【後期】					
墳墓種別	埋葬施設	総数	副葬	出現頻度	主な副葬品
区画墓(中心)	土坑墓	3	0	0%	
	木棺墓	10	3	33.3%	ガラス玉、管玉
区画墓(周辺)	土坑墓	10	1	10%	勾玉
	木棺墓	29	13	44.8%	管玉、石鏃
単独	土坑墓	14	0	0%	
	木棺墓	20	7	35%	管玉、鉄器
【終末期】					
墳墓種別	埋葬施設	総数	副葬	出現頻度	主な副葬品
区画墓(中心)	土坑墓	2	0	0%	
	木棺墓	18	8	44.4%	鉄刀、管玉
区画墓(周辺)	土坑墓	1	0	0%	
	木棺墓	19	3	15.8%	管玉
単独	土坑墓	1	1	100%	ガラス玉、管玉
	木棺墓	4	0	0%	



第3図 木棺規模の変遷



第4図 七尾市細口源田山遺跡の位置と主要遺構配置図



第5図 津幡町七野墳墓群と周辺の関連遺跡

富山県における弥生時代の墓制

青山 晃（公益財団法人富山県文化振興財団）

はじめに

富山県内における弥生時代の墓は中期後葉以降、方形周溝墓が主要な墓制となる。その他、土坑墓・甕棺墓なども確認されるが、今回は主要な墓制となる方形周溝墓を中心に県内の様相を示しておく。

1 中期の様相

6遺跡で24基の方形周溝墓が確認されている（表1）。高岡市の佐野台地北部縁辺部を中心に分布する。中期の遺跡は県内各地で確認されているが、方形周溝墓の分布に片寄りがあることは、墓制採用のあり方に違いがあった可能性がある。

方形周溝墓の平面形態は周溝の四隅、もしくは1か所が切れる形態となる。石塚遺跡・石名瀬A遺跡で両者が確認されるが、形態の違いにより構築位置・方位の規範が異なる傾向がある（図1）。

規模は、長軸で最大11.7m以上、最小4.3mとなる。墳丘の面積では最小で13㎡（高島A遺跡SX01）、最大で134.6㎡以上（下黒田遺跡SZ1）となり、明確な規模の違いが存在する（グラフ1）。

集落との関係では、建物を切るように方形周溝墓が造営される例や、工房址が近接して確認される例などから、居住域と墓域とが明瞭に分離せず、隣接していたことを示す。

2 後期～終末期の様相

県内では後期以降も主要な墓制は方形周溝墓で、10遺跡で計99基に及ぶ（表2）。終末期にかけてはそれ以外に、四隅突出型・前方後方型の墳丘墓も確認される。

形態は方形周溝墓では四隅、もしくは数カ所の隅が途切れる形態を中心とするが、周溝1辺の中央部が切れる形態が下佐野遺跡や百塚遺跡で、前方後方墳（墳丘墓）に先行して構築される（図2）。

規模は後期における方形周溝墓では百塚遺跡SZ19が約270㎡と隔絶した規模を誇る。それ以下では150㎡前後・110～75㎡・50㎡未満の規模に分かれる。終末期には110㎡以上・84～60㎡・60㎡未満の規模に分かれる（グラフ2・3）。

集落との関係では、布目沢北遺跡では後期の居住域が終末期には墓域となる。下佐野遺跡では終末期に居住域から墓域へと変わる。南太閤山I遺跡では谷を挟んで居住域と墓域とが対峙する。千坊山遺跡群では丘陵上に位置する墓域の眼下に集落が形成される。このように、居住域から墓域へ土地利用が変わることがあるが、同時に居住域・墓域としての利用は行われず、分離された状態となる。

また、方形周溝墓は後期～終末期に県内各地で確認されるが、円形周溝墓は終末期以降、主に県東部で採用される。円形周溝墓は弥生時代前期には岡山県・香川県付近の備讃瀬戸沿岸地域に定着した後、中期以降は播磨灘沿岸を経て東方・北方に拡大し、庄内期では摂津を中心に河内・大和・京都丹波・琵琶湖沿岸地域へ分布域を広げるように、東偏傾向にあるとされる（岸本 2001）。こうした動向の中で富山県東部へ波及したとするには、今後の検討がさらに必要となろう。

おわりに

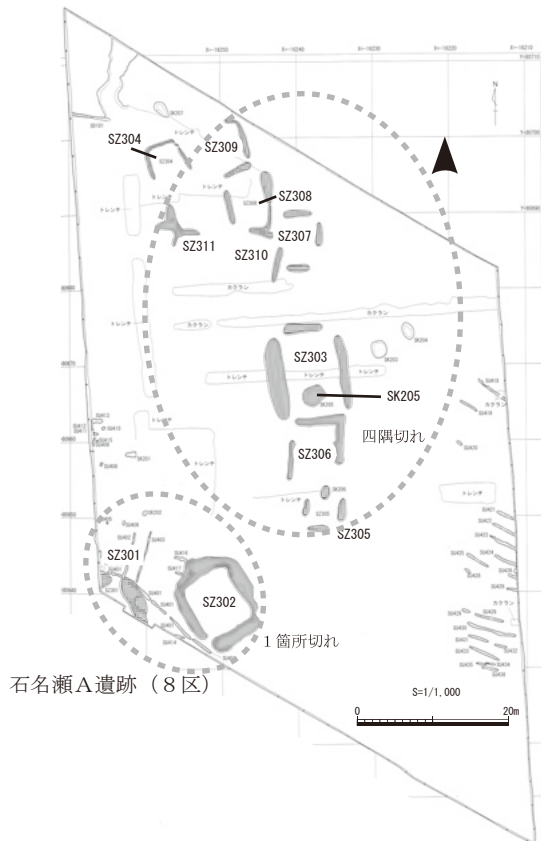
県内の弥生時代における墓制は、中期以降に方形周溝墓を中心とし、終末期には四隅突出型墳丘墓・前方後方型墳丘墓が加わる。また、県東部に円形周溝墓が確認できる。方形周溝墓の規模は各時期に複数のランクがあり、階層的な序列があった可能性を示唆している。墓域と集落との関係は、中期では近接、後期以降では分離する傾向がある。



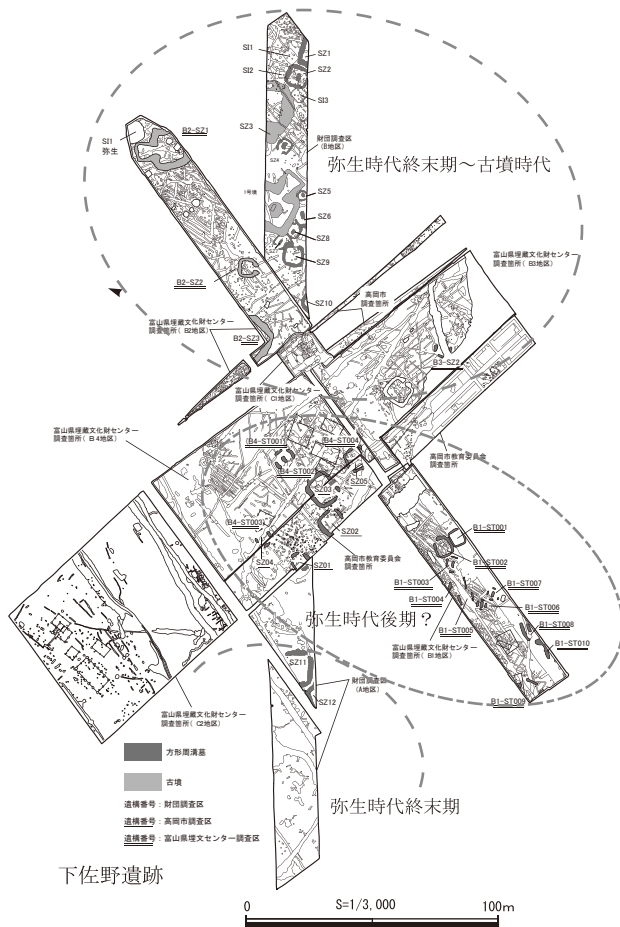
石塚遺跡（新鮮市場地区）

図1 中期の事例

※図1・2は各報告書を基に加筆・修正



石名瀬A遺跡（8区）



下佐野遺跡

図2 後期～終末期の事例



百塚遺跡・百塚住吉遺跡

所在	遺跡名	遺構	種類	規模(m)		主体部	文献
				長軸	短軸		
高岡市	下黒田	SZ1	方形周溝墓	11.7～	11.5	未確認	富山県文化振興財団 2013
		SZ2	方形周溝墓	7.7～	6.7～	未確認	
	諏訪	SZ15	方形周溝墓	—	—	未確認	高岡市教育委員会1993
		SZ40	方形周溝墓	6.7～	6.3	未確認	
	石塚	森田地区SZ04	方形周溝墓	7.2	6.3	未確認	高岡市教育委員会1995
		森田地区SZ05	方形周溝墓	4.2～	2.9	未確認	
		森田地区SZ06	方形周溝墓	8.1～	4.9～	未確認	
		森田地区SZ07	方形周溝墓	6.9	6.2～	未確認	
	石名瀬A	新幹市場地区SZ01	方形周溝墓	6	5.9～	未確認	高岡市教育委員会2007
		新幹市場地区SZ02	方形周溝墓	5.2	2.8～	未確認	
		SZ301	方形周溝墓	4.8～	2.5～	未確認	
		SZ302	方形周溝墓	8.1	6.3	未確認	
		SZ303	方形周溝墓	11.1	6.9	SK205? (3.1×2.5m)	
		SZ304	方形周溝墓	4.1～	4.1	未確認	
		SZ305	方形周溝墓	3.7	3.5	未確認	
		SZ306	方形周溝墓	5	—	未確認	
		SZ307	方形周溝墓	6.3	4.1～	未確認	
		SZ308	方形周溝墓	4.3	—	未確認	
		SZ309	方形周溝墓	5.8	—	未確認	
		SZ310	方形周溝墓	—	—	未確認	
		SZ311	方形周溝墓	(6.9)	—	未確認	
射水市	高島A	SX01	方形周溝墓	4.5	3.2	未確認	新湊市教育委員会2000
上市町	放士ヶ瀬北	SX02	方形周溝墓?	—	—	未確認	上市町教育委員会1999

表1 富山県内弥生時代中期方形周溝墓一覧

立地	遺跡	時期	方形周溝墓	円形周溝墓	四隅突出型	前方後方型	その他	古墳時代以降	備考
丘陵	平桜川東	後期	1						
谷地	下佐野	後期	15						時期不詳の方形周溝墓1
開状地	一口跡免	後期	1	1					
開状地	布目沢北	後期	1				1:方墳(白江～京群タムビ)		
丘陵	南大間山I	後期	8				4:土坑墓 2:環状墓		
丘陵	開山	後期	4				3:土坑墓		
丘陵	一ツ山古墳群	後期	—			1?	1:前方後方型?		
丘陵	森田地区	後期	—	1					
丘陵	鏡坂遺跡群	後期	—	2					
丘陵	鏡坂遺跡群	後期	—	2					
丘陵	六谷古墳	後期	—	1					
丘陵	尚野塚	後期	—	—		1(白江式)			
丘陵	森ノ山古墳	後期	—	—		—	1:方墳 1:方墳 1:方墳		
丘陵	杉谷A	後期	17	1					
丘陵	百塚住吉	後期	4	—					
丘陵	清水堂	後期	9	5		1(～白江式)	1:石組環状墓 2:方墳 3:円墳 3		
開状地	清水堂	後期	1	1			19:土坑墓		
開状地	新坂	後期	8						
開状地	新坂	後期	1				1:後期～終末期		
開状地	新坂	後期	40	0	1	1	11		
開状地	新坂	後期	39	8	3	1	11		
開状地	新坂	後期	99	8	8	2	35		

表2 後期～終末期の主要遺跡毎墳墓数

参考文献

射水市教育委員会 2007『高島 A 遺跡発掘調査報告』

岡田一広 2005「富山平野における弥生墓制」『季刊考古学』第92号 雄山閣

小矢部市教育委員会 1979『富山県小矢部市 平桜川東遺跡』

鹿島昌也 2012「第Ⅵ章 総括」『富山市 百塚遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

岸本一広 2001「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

上市町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター 1981『北陸自動車道遺跡調査報告 上市町遺構編』

上市町教育委員会 1999『富山県上市町 放士ヶ瀬北遺跡発掘調査概要』

新湊市教育委員会 2000『富山県新湊市 高島 A 遺跡発掘調査概要』

高岡市教育委員会 1993『市内遺跡調査概報Ⅲ』

高岡市教育委員会 1995『石塚遺跡調査概報Ⅲ』

高岡市教育委員会 2007『石塚遺跡調査報告』

高岡市教育委員会 2011『下佐野遺跡調査報告Ⅱ』

高岡市教育委員会 2012『石名瀬 A 遺跡発掘調査報告』

富山県教育委員会 1970『開山遺跡』

富山県教育委員会 1983『都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要』

富山県教育委員会 1984『都市計画街路 七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(2)』

富山県文化振興財団 2013『下黒田遺跡 下佐野遺跡 諏訪遺跡 蔵野町東遺跡 蔵野町遺跡 駒方南遺跡発掘調査報告』

富山県埋蔵文化財センター 1989『三谷遺跡・一ツ山古墳群』

富山県埋蔵文化財センター 2011『富山県高岡市 下佐野遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1991『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1)』

富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1992『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)』

富山県教育委員会 1975『富山市 杉谷(A・G・H) 遺跡発掘調査報告書』

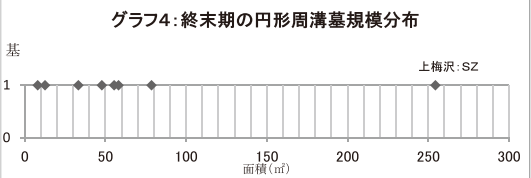
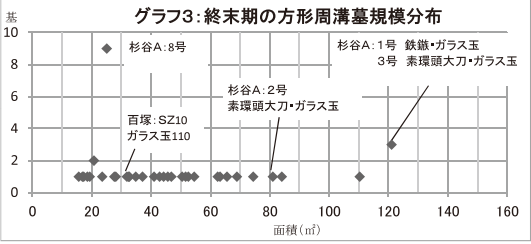
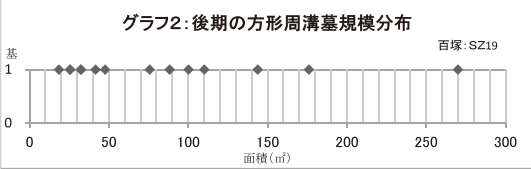
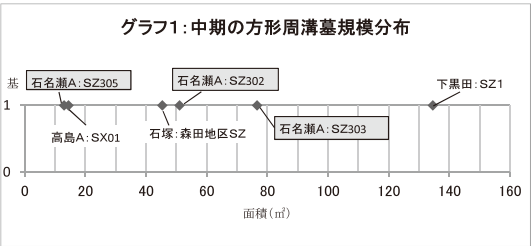
富山県教育委員会 2000『富山市 水橋清水堂南遺跡』

富山県教育委員会 2009『富山市 百塚住吉遺跡 百塚住吉 B 遺跡 百塚遺跡遺跡発掘調査報告書』

富山県教育委員会 2012『富山市 百塚遺跡発掘調査報告書』

豊島尚宏 2005『弥生時代の鉄製刀剣』奈良文化財研究所

婦中町教育委員会 2002『富山県婦中町 千坊山遺跡群試掘調査報告書』



新潟県における弥生時代の墓制

加藤 由美子（長岡市教育委員会）

はじめに

新潟県の弥生文化は、前時代から引き継がれた縄文文化を素地としながら、東北・中部高地・北陸の三地方の強い影響の下、成立・成熟する。墓制もまた然り。新潟県の弥生時代の墓制には、再葬墓・周溝墓・土坑墓があるが、その消長は他地域の影響を考えずして理解することはできない。ここでは、再葬墓が主体となる前期から中期前葉、周溝墓が出現する中期中葉から後葉、周溝墓が隆盛する後期の三時期に分けてその変遷を追ってみる。

1 弥生時代前期～中期前葉

主な墓制に再葬墓と土坑墓がある。再葬墓は縄文時代の伝統を継承する墓制で、一度埋葬した遺骸を後に掘り出し、その骨を集めて、壺や甕に納めて二次埋葬を行う習俗である。県中部から北部の阿賀野川流域と信濃川下流域に分布する。調査では複数基まとまって検出されることが多い。

新発田市村尻遺跡（第1図）には再葬墓9基と土坑墓2基があり、再葬墓と土坑墓がひとつの墓域に共存する様子が窺える。再葬墓である第91号土坑は、在地系の壺と東海系の条痕文の壺が計6個、整然と配置される。第12号土坑は平面が長楕円形を呈す土坑墓で、副葬品の大型壺とヒト形土器、二次埋葬に伴うと思われる焼骨と一緒に出土し、一次埋葬と二次埋葬の2つの要素を兼ね備えた墓として注目される。この時期の墓域と居住域の関係は不明な点が多いが、阿賀野市猫山遺跡では再葬墓に近接して3棟の掘立柱建物が検出されている。他には、阿賀野市六野瀬遺跡・大曲遺跡、胎内市分谷地A遺跡、新潟市緒立遺跡、長岡市三ノ輪遺跡でも墓が確認されている。

2 弥生中期中葉～後葉

再葬墓は姿を消し、土坑墓と周溝墓が主体となる。周溝墓は、北陸系の小松式土器の波及とともに県内に導入される。この時期は墓域が未だ独立せず、墓は居住域に築かれる。

玉作遺跡としても知られる柏崎市下谷地遺跡（第2図）の周溝墓は、掘立柱建物の隙間を縫うように配置される。これについては、建物の建て替えに伴い順次墓が築造されたとの指摘がある〔笹澤2012〕。下谷地遺跡のように墓が居住域に混在する例は、長岡市五千石遺跡の方形周溝墓や上越市吹上遺跡の玉作工房群中の土坑墓にも見られ、この時期の新潟県の墓制を特徴付ける要素のひとつである。

吹上遺跡（第3図）では中期末以降に方形周溝墓が本格的に導入される。1号方形周溝墓は、北側・南側の周溝で中部高地系の栗林式土器が多く、西側・東側の周溝では北陸系の小松式土器が多い状況が明らかとなり、葬送儀礼における土器供献の在り方を考える上で興味深い。また、銅鐸形石製品も出土しており被葬者の解明が期待される。一方、この時期は丘陵上にも周溝墓が出現する。三条市内野手遺跡では、標高33mの丘陵先端部に方形周溝墓が単独で築かれる。平地との比高差が21mあり、眺望に優れたこの地が墓域に選択された意義は、後の墓制を考えると大きい。周溝から東北系と中部高地系の土器が出土し、多系統の文化を受け止めながら成熟する、新潟の弥生文化を象徴するかのような遺跡である。

弥生時代前期に再葬墓を採用した県の北部に位置する阿賀野市狐塚遺跡では、中期後半の土坑墓群が知られる。調査で検出された遺構は土坑墓のみで、居住域との関係は不明である。完形ないし完形に近い甕・壺・高杯が、墓坑内の底面に据えられた或いは墓坑の上部にあたかも供えられた状態で出土した。北陸系の土器を意識したであろう施文や器形の土器も含まれ、北陸からの文化の波及が認められる。現時点で阿賀野市を始めとした県北部では方形周溝墓は確認されておらず、前時期に続き、

土坑墓が主体の墓制が展開していたと考えられる。

3 弥生時代後期

土坑墓と周溝墓が主体をなすことには変わらないが、前時期と比べて周溝墓の数が増加する。また、この時期初めて墓域が居住域と離れて独立する。墓の立地では、高地性集落の出現と共に丘陵上に築かれる墓が見られるようになる。鉄器やガラス玉などを伴う土坑墓もこの時期の特徴である。

中期末で触れた上越市吹上遺跡では、墓域が居住域から独立する。周溝墓は列を成すように築かれ、一部で周溝の共有も認められる。吹上遺跡に程近い上越市今泉釜蓋遺跡（第4図）では、後期後半に12基の周溝墓が列を成して築かれる。近接する釜蓋遺跡の墓域と考えられる。中期中葉に北陸からもたらされた周溝墓が、この時期ようやく北陸と同じルールに従って築かれるようになったと言える。

妙高市斐太遺跡は後期の高地性集落である。矢代山B地区で3基の土坑墓が確認され、2基から副葬品の鉄鏃が出土した。土坑墓に近接して竪穴住居跡も見つかっており、ここでは墓域と居住域が分離していない。近年の調査で後期前半の墳丘墓や墓坑群も確認されており、築造方法に丹後地方の台状墓とのつながりも指摘される。新潟県最北の高地性集落・村上市山元遺跡では、標高39mの丘陵上で後期前半の土坑墓が7基見つかかり、土坑墓SK1から68個のガラス小玉が出土した。県内のガラス小玉の出土例としては最多の数を誇り、伴う土器は東北系である。長岡市屋鋪塚遺跡では、比高差43mの丘陵上で周溝墓1基が確認されている。尾根のピークを削り出して造られ、中央に長さ4.1m×幅1.9m×深さ1mの墓坑を持つ。墓坑内破碎土器供献が認められ、丹後地方の台状墓の特徴を兼ね備えた周溝墓として注目される。

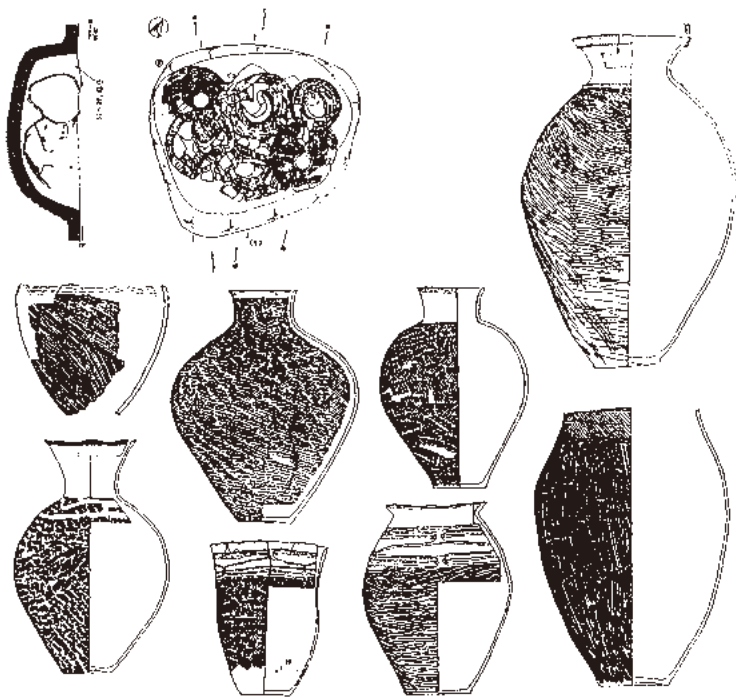
一方、長岡市姥ヶ入南遺跡の後期後半の周溝墓は、副葬品に鉄斧や鉄剣を持つ点で他の周溝墓とは一線を画している。同じく長岡市奈良崎遺跡で見つかった後期の周溝墓群は、傍らに住居址を伴い、その脇に古墳時代前期の円墳が築かれている。古墳の主体部から振文鏡・水晶製勾玉1点・緑色凝灰岩製太型管玉3点が出土し、弥生の周溝墓から古墳へ遷り行く様子が確認できる好例である。

おわりに

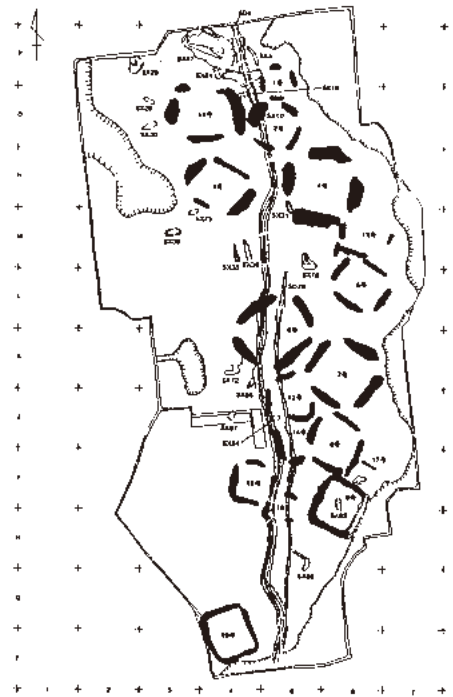
新潟県の弥生文化は極めて複雑で一例一例が個性的であり、一定の型式には当てはめにくい。ここで見えてきた墓制も、そのことを雄弁に物語っているのではないだろうか。各地方から同心円状に波及する文化、そして海を介してピンポイントで入ってくる文化の二通りの道筋を念頭に起き、理解していく必要があるだろう。

【引用・参考文献】

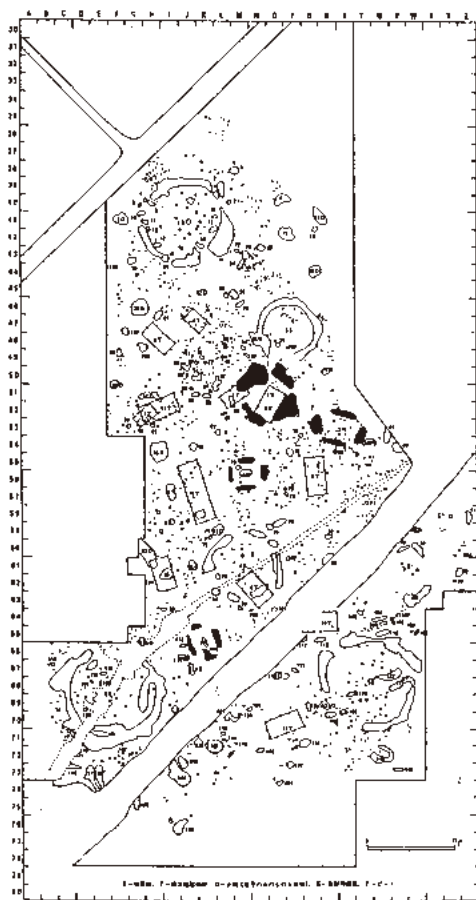
- 新井市教育委員会 2005『斐太歴史の里確認調査報告書Ⅰ』
- 笹澤正史 2010「北陸北東部の様相」『方形周溝墓の埋葬原理Ⅱ』鯖江市教育委員会
- 笹澤正史 2012「下谷地遺跡の集落構造について」『新潟考古』第23号 新潟県会考古学会
- 三条市教育委員会 1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』
- 新発田市教育委員会 1983『村尻遺跡Ⅰ』
- 上越市教育委員会 2010『今泉釜蓋遺跡』
- 上越市教育委員会 2011『吹上遺跡Ⅱ』
- 燕市教育委員会 2010『五千石遺跡2区・4区西地区』
- 寺泊町教育委員会 2004『新潟県寺泊町屋鋪塚遺跡発掘調査報告書』
- 新潟県教育委員会 1979『下谷地遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002『奈良崎遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『山元遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2009『庚塚遺跡・狐塚遺跡』
- 新潟県考古学会 2005『シンポジウム 新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』



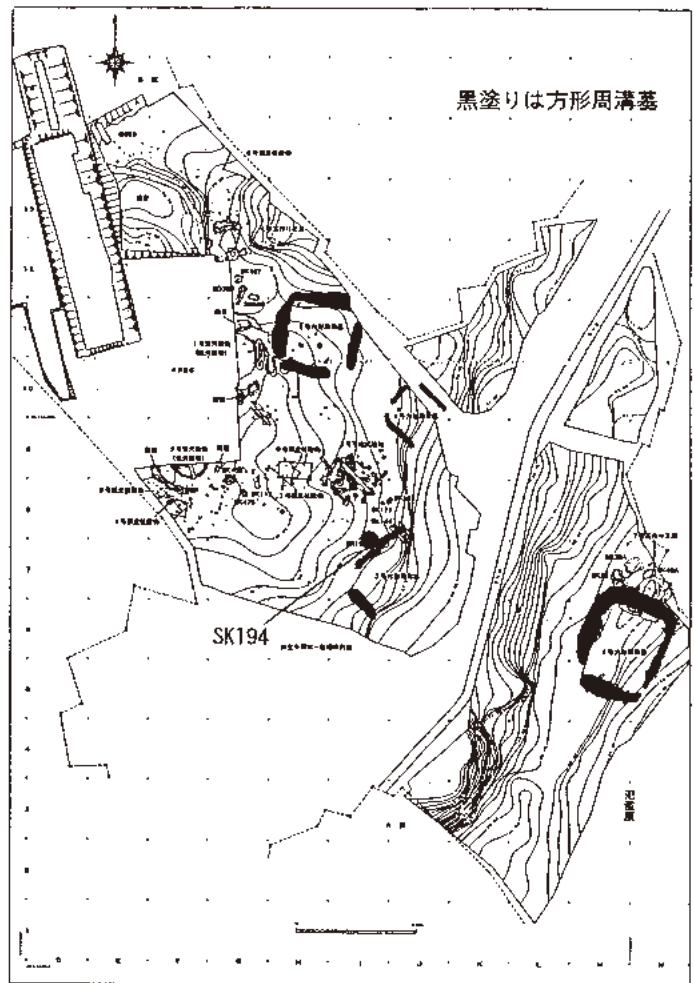
第1図 新発田市村尻遺跡第91号土坑
(遺構 S=1/50、遺物 S=1/16)



第4図 上越市今泉釜蓋遺跡
遺構配置図 (S=1/1250)



第2図 柏崎市下谷地遺跡遺構配置図
(S=1/1250)



第3図 上越市吹上遺跡遺構配置図 (S=1/1250)

東北地方日本海側における弥生時代の墓

木村 高（青森県埋蔵文化財調査センター）

はじめに

東北地方における弥生時代の墓は、均質な時空間分布を示さない。特に日本海側の事例は、太平洋側に比べ極めて少なく、1遺跡から数基程度の検出パターンが殆どを占め、縄文・古代の遺構・遺物と複合して検出される場合も多い。

1 東北地方日本海側における弥生時代の墓

第1期＝弥生時代前期後葉～中期前葉、第2期＝中期中葉～後葉、第3期＝後期、第4期＝終末期（古墳早期）と区分し、形態の変遷、分布の経時変化、副葬／供献品・着用品、儀礼具・儀礼痕跡、墓群・墓域・居住域との関連、地域間の交流に関する概略を、若干の所見を交えて第1表に示した。

第1期～第4期までの流れを大まかに見渡すと、第2期の前半（中期中葉）までは縄文時代の諸要素が継続（北部では北海道続縄文文化と連動、中部後半～南部では太平洋側の中中部後半～南部と連動）し、それなりの進展をみせるが、中期後葉以降は、墓の存在が希薄となり（住居跡等も同様）、副葬品類の種類も減少することから、かなりの変化が生じた状況を認め得る。

極端とも言えるこの事象の背景を探るには、気候変動や自然災害等の諸情報を総合的に検討する必要がある（山形西高敷地内遺跡では、縄文～平安時代にわたって幾度も洪水氾濫に襲われている（佐藤庄一ほか 1993））。

2 方形周溝墓について

東北地方日本海側における弥生時代方形周溝墓の検出は、現時点ではみられない。初現は古墳時代前期であり、南部山形県域の米沢盆地に認められる。佐藤鎮雄（2011）は、この地域における最古相のものとして、川西町下小松古墳群陣ヶ峰支群の「J-1号墳」（齊藤 2003）と米沢市比丘尼平「1号方形周溝墓」（手塚 1988）を位置づけ、さらに佐藤は「J-1号墳」を「前方後方形周溝墓」としている。

注視したいのは、方形周溝墓と「前方後方形周溝墓」という2つの形態が時空間的に近接して構築されている点と、隣県の福島県域には後期の段階で方形周溝墓は既に存在しているにもかかわらず、米沢盆地にはやや遅れて導入されている点である。米沢盆地という地理的特性より察し、これらは会津盆地周辺を經由して伝播したものかも知れない。

おわりに

古墳時代前期以降、中部～南部の山形県域は古墳文化の中に収まり、周辺地域との関係を深めながら発展するが、一方で北部は、北海道続縄文文化との関係を深めながら、別の文化を形成していく。この要因は、地理的条件が第一に作用していることは確かだが、山形県河原田（中期後葉）にみられる南系統の墓、青森県宇鉄（中期中葉）及び板子塚（中期後葉）にみられる北系統の墓は、その地域における次代の方向性を暗示している。

【引用・参考文献】

- 齊藤敏明 2003『下小松古墳群（5）』川西町教育委員会
柴一郎 1990『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書 第192集 秋田県埋蔵文化財センター
佐藤鎮雄 2011『やまがたの古墳時代－最上川流域のムラと古墳－』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐藤庄一 1993『山形西高敷地内遺跡 第5次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 第192集
菅原俊行 1986『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－地蔵田B遺跡－』秋田市教育委員会
手塚孝 1988『比丘尼平発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書 第21集 米沢市教育委員会

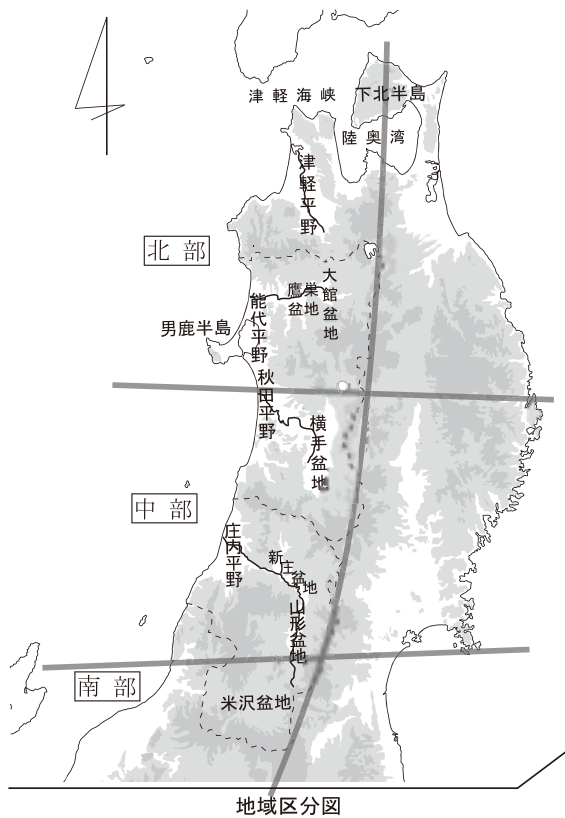
第 1 表 東北地方日本海側における弥生時代の墓（概略）

時期 特徴		第 1 期 前期後葉～中期前葉	第 2 期 中期中葉～後葉	第 3 期 後 期	第 4 期 終末期（古墳早期）
形態 の変遷	複棺型 再葬墓	生石2			
	土器 棺 墓				
	土坑墓				
	木棺墓		河原田		
	方形周溝墓				※方形周溝墓の初現は古墳時代前期
	分布の 経時変化	南部以外に検出されている。秋田平野以北に多く、下北半島陸奥湾沿岸や日本海沿岸、津軽・能代・秋田・庄内の各平野にみられ、平野部や沿岸部に目立つ。	北部～南部に広く分布。北部津軽平野・下北半島陸奥湾沿岸・日本海沿岸・津軽海峡沿岸・中部山形盆地・南部米沢盆地にみられる。青森県域における分布状況は以前とさほど変わらない。秋田県域では極端に減少。山形県域では内陸盆地に多くなる。中期後葉以降は全域において減少に向かう。	事例はかなり少ないが、南部以外に認められる。北部では青森平野・鹿角盆地・北部・鷹巣盆地、中部では秋田平野・横手盆地・新庄盆地・山形盆地と、少例ながら分布は広範囲。青森県域の事例が減少。	事例はさらに少ない。分布範囲は北部～中部であるが秋田平野・能代平野・大館盆地周辺と限定的。第3期にみられた広範囲な分布とは異なる。
	副葬／ 供献品・ 着 装 品	土器は供献が主体。検出面～埋土上位からの出土が多く、底面への副葬例は現時点で確認できない。土器に次ぐ副葬品は石器類で、複数遺跡に認められる器種は石鏃。通常は数点の副葬だが、北部津軽平野の弘前市宇田野1号墓からは28点出土しており、統縄文文化の影響と考えられる。着装品としては玉類（垂飾品）が主で、小玉・管玉・勾玉等が認められる。	第1期をほぼ踏襲するが、種類がやや増。北部下北半島陸奥湾岸の板子塚(中期後葉)では、複数の土坑墓に多数の石鏃が副葬され、特に8号墓には特大の石製墓標が伴い、ヒスイ製勾玉・有孔石製品・環状赤色顔料等の着装品の他、134点もの石鏃が副葬されており、統縄文文化の影響と考えられる。着装品としては、北部青森県域・津軽海峡に面す宇鉄(中期中葉)の14号墓の碧玉製管玉356点が著名。宇鉄の副葬土器には、統縄文土器(恵山式)が多くみられる。有機質の着装品としては、北部津軽平野の尾上町五輪野の土器棺墓内から出土したベンケイ貝製の腕輪片がある。	好事例が無いため、確定的ではないが、第2期に比べ種類は減り、土器と数種の石器(石鏃・スクレイパー・石斧等)という程度。石鏃は、アメリカ式が顕在化。着装品は現時点で確認できない。	ほぼ第3期を踏襲すると思われる。弥生系土坑墓では土器・アメリカ式石鏃がみられ、いずれも供献。統縄文系土坑墓である北部能代平野の秋田県能代市寒川Ⅱでは、上面への土器供献と底面への土器副葬が1つの土坑墓で組み合わせられている。寒川Ⅱでは、刀子・鉄斧といった鉄製品が含まれている。
	儀礼具・ 儀礼痕跡	儀礼具とみられるものは、剥片およびそれに付随する石器等。北部日本海沿岸・青森県深浦町津山の4号墓には、石核・剥片・凹石が伴い、下北半島陸奥湾岸・脇野沢村瀬野の土坑墓では、検出面に30点前後の自然石。儀礼痕跡とみられるものは、土坑墓底面に残るベンガラ。宇田野では5基の土坑墓のうち1基に、北部津軽平野の平賀町大光寺新城跡では5基の土坑墓のうち4基にベンガラが検出。	儀礼具は、宇鉄・板子塚の両遺跡から玉髓や珪質頁岩、黒曜石の剥片がみられ、葬送時における各種石材の破砕行為が推定される。宇鉄では3基の坑底にベンガラがみられ、坑外においてもベンガラがブロックで検出されており、墓域内でのベンガラ粉末の調整行為が推定される。	北部秋田県域・鹿角盆地北部の小坂町はりま館D区的事例より、供献土器は、土坑墓上面で意図的に破砕されている可能性がある。土坑墓上面およびその周囲に焼土がみられ、焚火行為の存在が推定される。	不明。
	墓群・墓域・ 居住域との 関連	墓域の好例は、秋田県八竜町館の上と秋田市地蔵田。両遺跡とも土坑墓と土器棺墓が同一空間に併存していた可能性示す。館の上は土坑墓56基と土器棺墓24基、地蔵田は土坑墓51基と土器棺墓25基で墓域を構成。地蔵田の墓域は、居住域に隣接。墓域は「北東群と南西群」に分かれている(菅原ほか 1986)。	北部では、青森県川内町板子塚、同県津軽半島先端の三蔵村宇鉄、中部では山形県山形盆地の山形市河原田(中期後葉)、南部では、山形県米沢盆地の南陽市百刈田、米沢市堂森が挙げられる。宇鉄(中期中葉)では、土坑墓16基と土器棺墓4基が共存していたとみられる。広い空間がありながら、多量の管玉を有する14号墓の付近に4基の土坑墓が重複している。板子塚からは土坑墓14基(註3)が検出され、多量の副葬石鏃を有する8号墓を中心に他の土坑墓がまとまる傾向がある。河原田(中期後葉)では、木棺墓群から約15m、約10m、20mの離れたところに「住居跡」が3軒検出されている。	一定範囲に数基の墓がまとまる状況は検出されていない。北部の小坂町はりま館D区からは、住居跡1軒・井戸跡1基・土坑墓6基が検出されている。土坑墓にまともりは認められない。これら3種の遺構は4時期に分けられ、Ⅱ期とされた段階では、住居から南西に10m、西に35mのところ土坑墓が1基づつ構築されている(柴ほか 1990)。	寒川Ⅱでは6基の土坑墓が逆J字状に並んで検出されている。
	地域間の 交流	生石2の土坑墓は18基。うち1基(SK25)は、土器5点が正立状態で埋置された複棺型再葬墓。福島県域・宮城県南部からの伝播と考えられる。	北部の宇鉄14号墓の管玉は、分析8点のうち不明3点を除く全てが新潟県佐渡猿八座、板子塚8号墓の石鏃に含まれる黒曜石製4点の産地は全て北海道十勝産、ヒスイ製勾玉は新潟県糸魚川産。玉は北陸、黒曜石は北海道、というルートがある。山形盆地の河原田(中期後葉)の木棺墓5基は七浦式(桜井式並行)期のもので、板状木質と樹皮状木質の2種がある。	墓および副葬品等の情報が少なすぎ、地域間交流を考えるに至らない。ただし、土器は天王山式系、石鏃はアメリカ式が顕在化することから、地域間交流は広いと推定される。	寒川Ⅱの土坑墓6基の全てに、北海道統縄文文化由来の柱穴状ビットが伴う。副葬土器は、統縄文土器(後北C2・D式)が主体だが、1基には十王台式系壺が伴う。土坑墓構造と主体の副葬土器は統縄文文化の要素、副葬鉄器と十王台式系壺は南からの搬入と考えられる。

(註1) 報文では、河原田遺跡の南方約1.5kmに位置する江俣遺跡と仙台市西台畑遺跡でも木棺墓の可能性をもつ土坑墓が検出されているという(木質の残存は無い)。

(註2) 第3期に数例みられる土器埋設遺構は、土器棺墓とは見なしがたい。

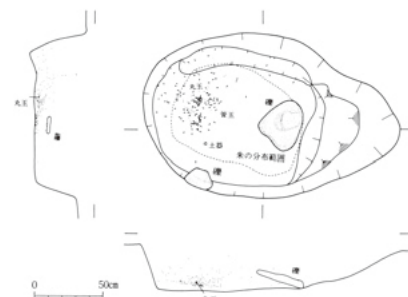
(註3) 報文における土坑墓数は1基であるが、今回の検討で中期後葉に属す土坑5基を土坑墓に加え、計14基とする。



地域区分図



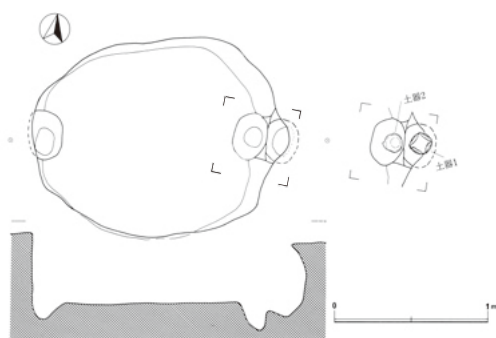
地藏田遺跡 土器棺
(第1期)



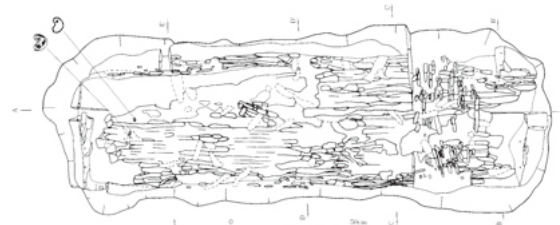
宇鉄遺跡 土坑墓(14号墓)
副葬品等の出土状況
(第2期)



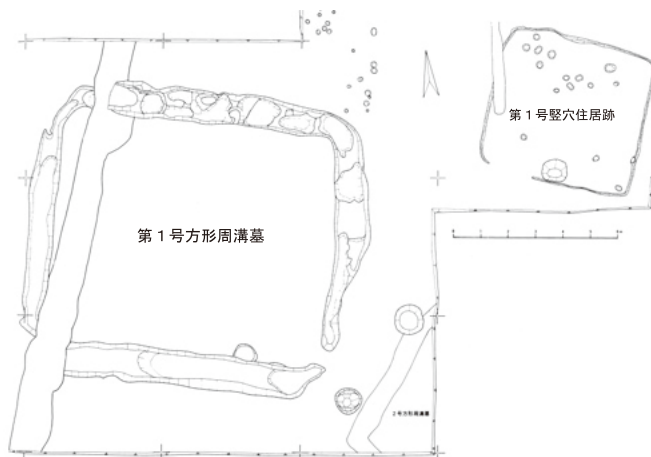
板子塚遺跡 墓の配置と副葬品
(第2期)



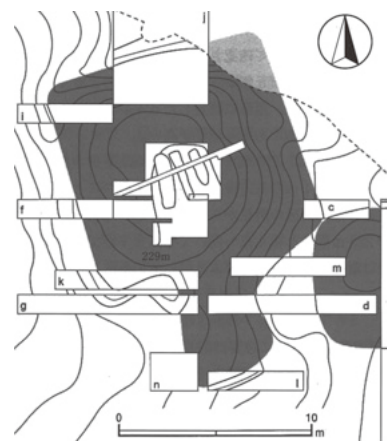
寒川Ⅱ遺跡 土坑墓
柱穴状ピットと袋状ピット
(第4期)



河原田遺跡 木棺墓
床材検出状況
(第2期)



比丘尼平遺跡 第1号方形周溝墓



下小松古墳群陣ヶ峰支群 J-1号墳

第1図 地域区分図・各地の弥生時代の墓・方形周溝墓と前方後方形周溝墓(古墳時代前期)

討論と見学会について

9名の講師による発表終了後、総括として討論が行われた。討論では第一に方形周溝墓を含む北陸の弥生時代の墓について、他地域との異同を確認する中で北陸の墓制の特徴を明らかにし、第二に北陸の方形周溝墓の出現についてその時期と系譜を検討し、第三に墳形、墳丘規模、副葬品等から想定される階層性について踏み込んだ。

まず第一の検討課題について、北九州では後期になると墓の規模が縮小するのに対し、山陰以東では台状墓や四隅突出型墳丘墓など大型墓が出現しており、それらを築造するための労働力の集約と社会基



討論の様子

盤の整備が背景にあったことが想像される。また、甕棺墓が中心となる北九州では集落との関係が不明瞭なのに対し、墓と集落との地理的關係が密に捉えられていることが指摘された。山陰との対比においては、後期後半に四隅突出型墳丘墓が築造される点では共通するものの、潟湖周囲に墳丘墓が築造され、近接して土坑墓、木棺墓が形成される傾向がある点、大型墳丘墓の近接集落には同時代の大型竪穴建物が存在する点で北陸とは異なることが確認された。近畿北部との対比では、丘陵上に方形周溝墓が築造されるのは中期中頭までであるのに対し、北陸では逆に低地から丘陵上に立地が移動するという違いが指摘された。また、後期中頭に土器供献など画期を見いだせる近畿北部に比し、北陸は画期がやや遅れるとの指摘もなされた。

第二の検討課題については結論から言えば北陸地方における方形周溝墓の出現期は中期前葉、本格的に普及するのは中期中葉である。若狭で調査された中期前葉の事例が最も古く、越前以東については中期中葉以降に導入された墓制である点を確認された。若狭で早い段階で方形周溝墓が採用される背景には西接する近畿北部ではなく大和や河内の影響が想定されとの見解が出されたが、近畿北部の様相を見ると墓制に関しては近江―若狭ルートが先に開けた可能性があるとの見解も示された。中期中葉の方形周溝墓が確認されている小松市八日市地方遺跡では、集落内部が居住域と墓域のセットから構成される三つのグループに分かれるが、それぞれで採用された墓の形態が異なることから、一地域だけからの影響を受けているのではないことが窺われ、集落開始時期の土器様相には近畿北部の影響が確認されていることからすると、単純に若狭に導入された墓制が東遷していったとは言えない状況がある。

また円形周溝墓については播磨・摂津などが分布域の中心であり、近畿では中期中葉には方形周溝墓と共存するが後期に減少、終末期に再び増加に転じる様相がみとれることから、越中で確認されている弥生終末期～古墳初頭頃の円形周溝墓についても後発期の段階に近畿から影響を受けた可能性があるとの指摘もあった。なお、円形周溝墓と報告されていた能美市西山墳墓群の西山6号墓に関しては、近年の検討で、土坑墓の構築後に後期古墳の円墳が築造され、後に墳丘が削平された結果、円形周溝墓と誤認した遺構であるとする見解が参加者から発表された。

第三の検討課題である階層性に関しては、山陰の様相として高塚の墳墓が墓の階層の頂点にあり、周溝墓はワンランク下であるとの見方が示されたが、鳥取県妻木晩田遺跡の調査例からすると、集落



討論の様子

人口の大半は階層最下の無埋葬であった可能性が高いと報告された。

北陸全般については、平地に立地する方形周溝墓よりも丘陵上に立地する台状墓などが副葬品は多彩で、特に後期後半にその内容が豊かになることが確認された。能登では後期に埋葬施設が大型化する様相があり、後期後葉に鉄製品とガラス玉が副葬品に採用される点に階層性がみえてとれる。これら副葬品については西日本との交流品と想定されることから、遠隔地との交流によって得た武器や装身具を所持することが当時のステータスであったこと、そ

れらが北陸以東まで運ばれている点から、北陸が西日本との交流の窓口ともなっていたとの見解も示された。

今回の研究集会では日本海側の周辺地域における最新の研究成果との対比によって、北陸の弥生時代の墓の特性が明確になった。その一方で、これまで貼り石を持たない四隅突出型墳丘墓については越前の主体性を示すものと理解されていたが、山陰地方にも事例が1基のみではあるものの存在することが指摘され、伝播ルートなど多くの検討課題が残されていることが顕在化することにもなった。

なお、今後それらの課題が明らかにされることを期待する参加者の言葉を受けて、討論は終了した。

翌日の資料見学会では、県内各地の方形周溝墓等から出土した遺物が検討された。弥生時代後期～終末期の墳墓群として著名な金沢市七ツ塚墳墓群出土の鉄製品や玉類、かほく市中沼C遺跡出土の祭式土器や玉類、県内唯一の南新保C遺跡出土の銅釦、金沢城下町遺跡の下層で方形周溝墓を検出した大手町墳墓群出土の彩文を持つ土器などが注目を集め、それらと他地域出土資料との比較検討が行われ、系譜をどこに求めるかなど、地域間交流についての活発な意見交換がなされた。また、最新の方形周溝墓の調査事例として七尾市千野遺跡の調査成果が紹介され、その内容について検討された。

(岩瀬由美)



資料見学会の様子

平成24年度学習講座 「須恵器づくり」の概要

大 西 顕

本報告は、石川県教育委員会及び財団法人石川県埋蔵文化財センターが、平成24年度に実施した古代体験学習講座「須恵器づくり」について、その概要を報告するものである。本学習講座は、平成13年度より石川県埋蔵文化財センター古代体験ひろば体験工房及び復元古窯（半地下式）において実施されており、今回が12回目の開催となる。本講座の趣旨は、県内の遺跡から出土した須恵器を参考として、現代の食器の原形ともいえる須恵器の杯（つき）などを実際に製作し、復元古窯で焼成を行うことで、古代の技術や文化に対する理解を深めるというものである。平成13～14年度の実施状況及び復元古窯の構造については文献1に詳細が記されている。

平成15～23年度の経過 平成15年度以降の状況については第1表に主な点をまとめた。平成16年度の変更点は次のとおりである。第1に窯焚き焼成時間をこれまでの2泊3日50時間前後から、3泊4日の75時間程度に長くし、総熱量を多くした。第2に、窯焚き時に冷気が焚口上部から内部に入り込んで温度上昇を妨げていると想定されたため、焚口を狭くした。第3に、火の引きが強く、窯内の熱気流出が促進されていると考えられたため、排煙口を従来より低い位置にした。その結果、1,200℃を超える窯内最高温度を得ている。平成17年度は、窯閉塞直前の薪大量投入を止め、燻し焼きをやや抑えた。平成18年度は、実験的に焼成時間を61時間に短縮した。また、平成17年度の経験より、1,100℃以上の高温域において、薪の組み方、投入方法によっては松より雑木の方が温度の上昇する可能性が高いと推定されたため、燃料は雑木のみ使用にとどめた。結果としては、焼成時間が足りないためか、やや物足りない焼きであった。平成19年度は焼成時間を70時間を超えるものとし、燃料に松も使用した。また、製作に使用する粘土についてこれまで小松市内で採掘された黄色系粘土（販売名「九谷A」）を使用していたが、鉄分が多く焼き具合が黒味のやや強いものになっていたため、平成19年度より、滋賀県信楽周辺で採掘された2種類の粘土、すなわち販売名「信楽（白）」と「信楽（赤）」を8：2の割合で調合して使用した。平成20～22年度は、大きな問題はなかったものの、焼きあがった作品の色調として白味がやや強くなるという点や、一部作品に灰が溶けきらず「ざらつき」を残す作品が見受けられ課題とされた。平成23年度は焼き締まった作品であったものの、焼け歪みが著しく、自然釉の付着が非常に多く灰釉陶器の様相を呈していた。また、各年度で共通する課題としては、大量のオキが溜まり、燃焼室内に薪を投入するスペースが無くなるという点である。これには、主に次の対策がとられた。①1回の薪投入量を抑え投入回数を増やす。②焚口を狭めることで空気の流入速度を速くし燃焼効率をあげる。③オキが溜まる後半以降は、オキが溜まりにくい松材を使用する。④薪の置き方について、空気の通り道を確保し不完全燃焼を避けるように置く。例えば薪を交差させて置く、間隔を詰めすぎない、燃え尽きていない薪の上に新たに重ね置きしない、などである。⑤オキを長い鉄工具で攪拌し、下部に燃焼しないまま黒く残ったオキを燃焼させる、⑥オキを窯外に掻き出す、以上があげられる。

平成24年度の経過 学習講座は10月28日（日）に古代体験ひろば体験工房にて実施した。須恵器成形は一般から募集した20名が参加し、午前9時30分から午後3時までの日程で行った。講座ではまず、須恵器の特徴や県内における窯跡の状況の説明が行われるとともに、実物の須恵器の観察を行った。次に「底部円盤紐水挽」技法により無台杯の製作が行われ、次に小型壺が製作された。使用した粘土は、「信楽（白）」と「信楽（赤）」を7：3の割合で調合したものである。使用粘土量は参加者一人当たり約3kg、製作点数は一人当たり4.5点である。作品は体験工房で乾燥された。窯詰めまで

の間に、職員により実験用作品が製作されるとともに、各作品をどのように窯詰めするか計画が行われた。製作された作品総点数は250点である。窯詰めは11月26日（月）に先述の配置計画に従い行った。前から後ろまで計6列に分かれた焼成部のうち、一般体験者製作品は、従来の焼成結果で適正な温度が得られている2列目と3列目の2段目以上に配置した。壺は自然釉がかかりやすい最上段に、杯は降灰が少ない2～3段目に置いた。職員製作品は、その他の位置に配置した。大型品は1列目と、煙道口を塞ぐようにして6列目に置いた（熱が窯外に流出するのを防ぐため）。

窯焚きは11月27日（火）午前9時に焚口にて点火し開始した。焚口の断面積は約0.2㎡である。なお、この焚口の大きさは、古代須恵器窯の焚口と比較して適正かどうか、発掘事例からの検証が難しいが課題として残っている。

焼成にあたっては、次の点を注意した。1つは熱量の問題である。適正な温度にするため昨年度より若干想定温度を下げる必要があったが、ここで問題となるのは作品数である。総点数は昨年より40点減少したに過ぎないが、昨年度より大型品が非常に少なく、使用した総粘土量は計測していないが、かなり減少したものと推定された。窯内の作品は燃焼により自らが熱源となると言われ、一般には作品数が少ないと温度が上がりにくいとされる。よって、想定温度を昨年度と同じくすれば、作品数の減少による温度減少効果と相殺して適正な温度になるのではないかと考えた。また、オキの掻き出しとオキの攪拌は、できるだけ少なくなるよう注意した（古代において攪拌と掻き出しが行われていたか現段階で検証ができていないため）。焼成経過は第2表のとおりである。50時間経過したところでオキの大量蓄積が問題となり、この調整のため若干温度が下がったが、薪を入れるスペースが増えたため、その後、松を含めて薪の投入量を増やし温度を高めていった。開始72時間後で熱電対温度計測点2（F4棚）において1,200℃に到達できた。最高温度は開始後73時間で測点1（燃焼部上面）において計測した1,224℃である。

閉塞は開始75時間後の11月30日（金）の11時57分に開始した。最後の薪を1束投入後、焚口を耐火レンガで塞ぎ、その隙間に水で練ったエンゴロ土を詰め込んだ。12時19分にこの作業を終え、さらに外側にもう1列耐火レンガを積み、隙間に土砂を詰め込み13時15分に焚口の閉塞作業を終えた。排煙口の閉塞は、炎の噴出が収まった12時25分頃より開始し、棚板で蓋をし、これに土砂をかぶせて13時20分に終了した。窯焚きに使用した薪は雑木が333束、松が90束である。薪は1束が10本前後で長さ40cm、乾燥重量は8.5kg程度である。閉塞後は冷却工程になり237時間冷却を行った。窯出しは、12月10日（月）午前9時より行った。焼成部にたまったオキは、わずかながら内部で燃えていた。オキの量は正確に計れないが、平成23年度の2／3程度と推定される。窯出しの際は、作品の火面の位置にチョークで印をつけると共に、棚毎に窯出し直後の状況について写真を撮影した。そして14時30分頃までに窯出し作業を終了した。

焼成結果 窯内の温度変化の推移については、第1図のとおりである。合計5箇所に設けた熱電対のうち、中央上部に配置された測点3（平成14年度の測点2と同位置）で比較した。開始後45時間経過付近から若干低くなって推移している。オルトンコーンによる熱量比較は第3表のとおりである。平成23年度より、特に中央部付近で熱量が少なかったことがわかる。作品の焼成状況については第2図のとおりである。まず、降灰（自然釉）の付着状況であるが、オキの攪拌をほとんどなかったにもかかわらず、1～3列目の作品に多くの降灰（自然釉）が付着していた。Aの範囲は降灰が融け、ガラス化した緑灰色の釉が融着していた。B1の範囲は、乳白色の自然釉が融着していた。B2の範囲は乳白色の自然釉の上面において、降灰が融けきらないまま黒粒状に融着しており、外見上見栄えが良くなかった。Cの範囲は、Bの範囲で顕著に見られた黒粒状の降灰が、茶褐色の灰となりか

ぶっていたが、融着することは少ない状況であった。降灰の量自体が少なかったものと推定される。平成23年度ではAが前から2列目前半まで、Bが2列目後半から4列目前半まで、Cが4列目後半から6列目までである。平成24年度でみられた黒粒状降灰は観察されておらず、B2に相当するものはない。平成24年度は平成23年度に比べ、各範囲が1列分程度、焚口側に後退したことがわかる。

今回の焼成で顕著に確認された黒粒状降灰は、焼成の終盤で発生した灰が熱量不足で融けきらなかったものと推定される。結果として、熱量不足は想定以上のものがあつた。熱量不足はいくつかの原因が複合した結果と思われるが、作品数（使用粘土総量）の少なさにより蓄熱が弱かったことが原因の1つであつた可能性がある。因果関係を確認づけることは難しいが、今後、製作に使用した粘土量を計り、この点について検証していく必要がある。今回の焼成では、温度計の記録では顕著な温度低下はみられなかったが、熱量減少（オルトンコーン測定）は顕かで、この温度計とオルトンコーンとの数値差が今回の焼成の特徴である。また、今回の結果より、降灰は量の多少はあるものの、窯焚き時にはどうしても発生するものと判断された。食器として杯内面に降灰があるのは好ましい状況ではなく、器面に降灰が融着しない方法、重ね焼きなど古代技術を参考に工夫していく必要がある。還元の状態であるが、ほとんどの作品は器表面が還元色の灰白色を呈していた。また、試験的に割って内部を観察した作品も、灰白色を呈しており、還元については大きな問題はなかった。焼け歪みについては、数値的に結果を報告できないが、肉眼観察では平成23年度より歪みは少ない。収縮率は92%程度である。平成13年度作品に顕著に発生した銀膜の付着は無かった。また、実物の須恵器には胎土に砂粒を含んでいることが確認できるが、今回、砂粒を調合（5%、10%）した粘土でも焼成した。実験点数が少なく参考までの結果であるが、収縮率は砂を混ぜないものと違いはほとんどなかった。また、黒点状斑点が特徴的に観察できた。作品製作の際は、特に10%調合粘土で水挽き時に手に砂粒があたって痛く、体験用粘土として使用する際は注意を要すると考えられる。以上、甚だ簡単であるが平成24年度の状況について記述した。

今回、本講座を実際に担当してみて、窯焚き作業の難しさを痛感した。思うように温度が上昇しない、作品に降り注ぐ大量の灰、蓄積する大量のオキ、窯内の前列と後列で著しく異なる焼き具合など、古代ではどのように各問題を対処したのだろうか。本講座に限らず、古代体験学習で重要なことは作品が完成するまでの、その過程を体験するなかで古代の技術をより理解することであると思う。今後も、焼成作品や実物の須恵器資料の観察、須恵器窯跡の発掘調査事例の確認、そして実際の窯焚き作業、これらを総合して古代の技術を知り、復元していく必要があると思われた。

参考・引用文献

- 1 川畑 誠 2003 「平成14年度学習講座「須恵器づくり」の概要」『石川県埋蔵文化財情報 第10号』（財）石川県埋蔵文化財センター
- 2 端 猛 2009『平安時代のワザ』平成21年度 まいぶん考古学講座配布資料 （財）石川県埋蔵文化財センター
- 3 窯跡研究会編 2010 『古代窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』 真陽社

年度	作品数	使用粘土	窯焚き期間	焼成 時間 (時間)	最高温度 中央温度計 (測点3)	熱量 (前より3列目 2段目)	薪束数		
							雑木	松	計
H13	80点	信楽白	12/1日～12/3火	49	1163℃				
H14	450点	九谷A	11/16土～11/18月	51	1116℃	1160℃ ～ 1205℃	226	157	383
H15	620点	九谷A	11/14金～11/16日	51	1095℃		165	193	358
H16	380点	九谷A	11/11木～11/14日	77	1219℃		293	143	436
H17	510点	九谷A	11/17木～11/20日	76	1206℃		276	141	417
H18	360点	九谷A	11/16木～11/18土	61	1168℃		356	1	357
H19	390点	信楽白＋信楽赤	11/22木～11/25日	73	1223℃		333	150	483
H20	390点	信楽白＋信楽赤	11/21金～11/24祝	75	1225℃	1260℃ ～	369	102	471
H21	410点	信楽白＋信楽赤	11/20金～11/23月	75	1223℃	1249℃ ～ 1260℃	323	93	416
H22	470点	信楽白＋信楽赤	11/19金～11/22月	75	1190℃	～ 1239℃	344	90	434
H23	290点	信楽白＋信楽赤	11/15火～11/18金	75	1215℃	1260℃ ～	376	60	436
H24	250点	信楽白＋信楽赤	11/27火～11/30金	75	1206℃	1186℃ ～ 1239℃	333	90	423

第1表 各年度須恵器づくりの記録 *文献2に加筆

焼成延べ 時間 (h)	測点 3		薪の投入数			
	温度変化 (℃)	平均 上昇度 (℃/h)	雑木 (束)	松 (束)	総数 (束)	平均束数 (束/h)
0～9	12 → 380	36.8	25	0	25	2.5
9～17	380 → 541	20.1	31	0	31	3.9
17～24	541 → 803	32.8	33	1	34	4.3
24～32	803 → 877	9.3	43	0	43	5.4
32～36	877 → 911	8.5	21	0	21	5.3
36～42	911 → 1,019	18.0	34	0	34	5.7
42～48	1,019 → 1,033	2.3	33	0	33	5.5
48～54	1,033 → 1,058	4.2	22	5	27	4.5
54～60	1,058 → 1,116	9.7	26	23	49	8.2
60～66	1,116 → 1,167	8.5	25	20	45	7.5
66～72	1,167 → 1,198	5.2	33	28	61	10.2
72～75	1,198 → 1,153	-15.0	7	13	20	6.7

第2表 平成24年度焼成経過

平成23年度

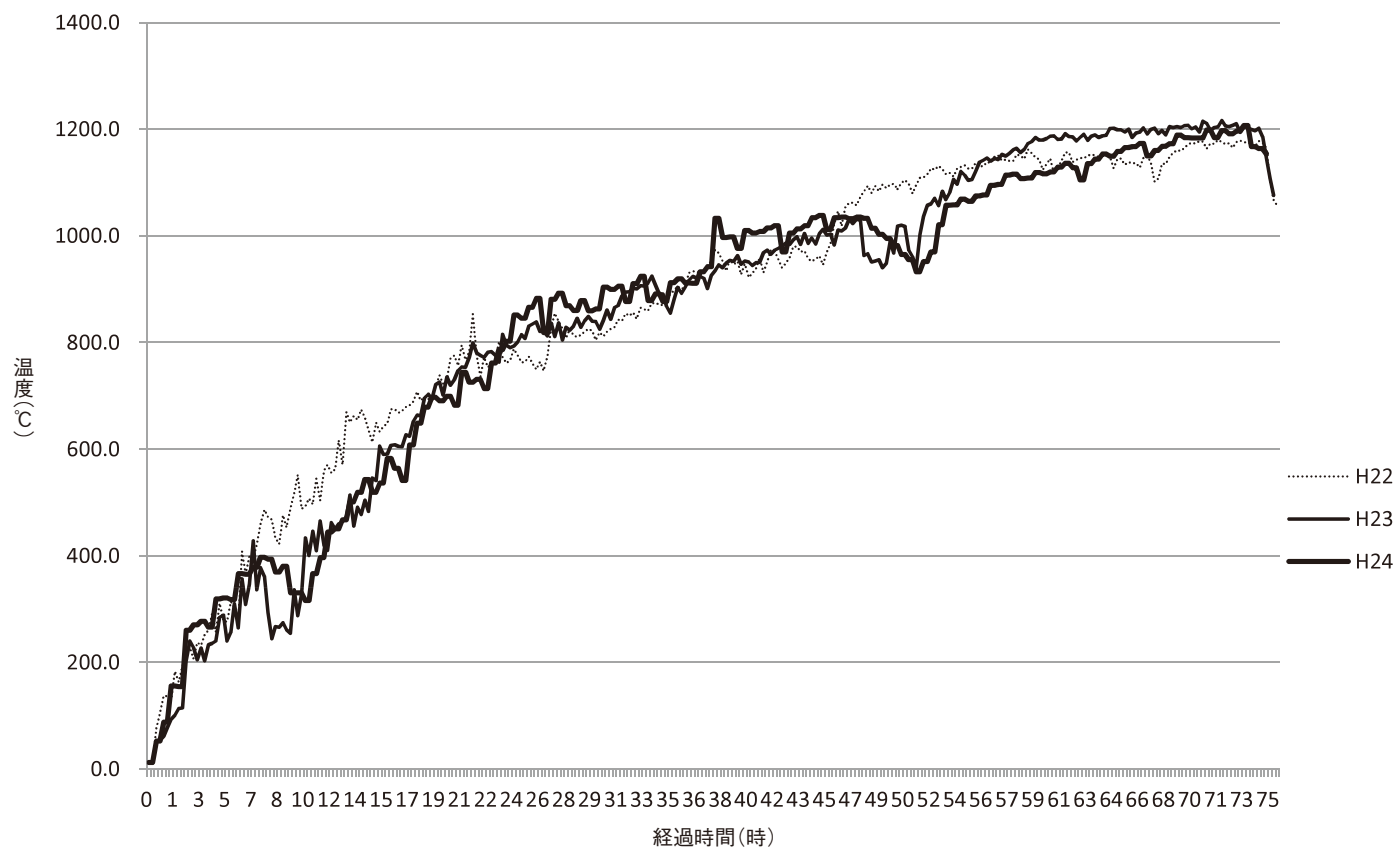
列	段	棚番号	整理 番号	完倒コーン 最高温度 (℃)	不完倒コーン 最低温度 (℃)
1	2	B 2	6	1,239	
1	3	A 3	8	1,285	1,306
1	3	B 3	7	1,285	1,306
1	3	C 3	5	1,239	
2	4	E 4	4	1,285	
3	2	H 2	3	1,260	
4	1	K 1	2	1,186	1,239
5	3	M 3	1	1,230	1,239

平成24年度

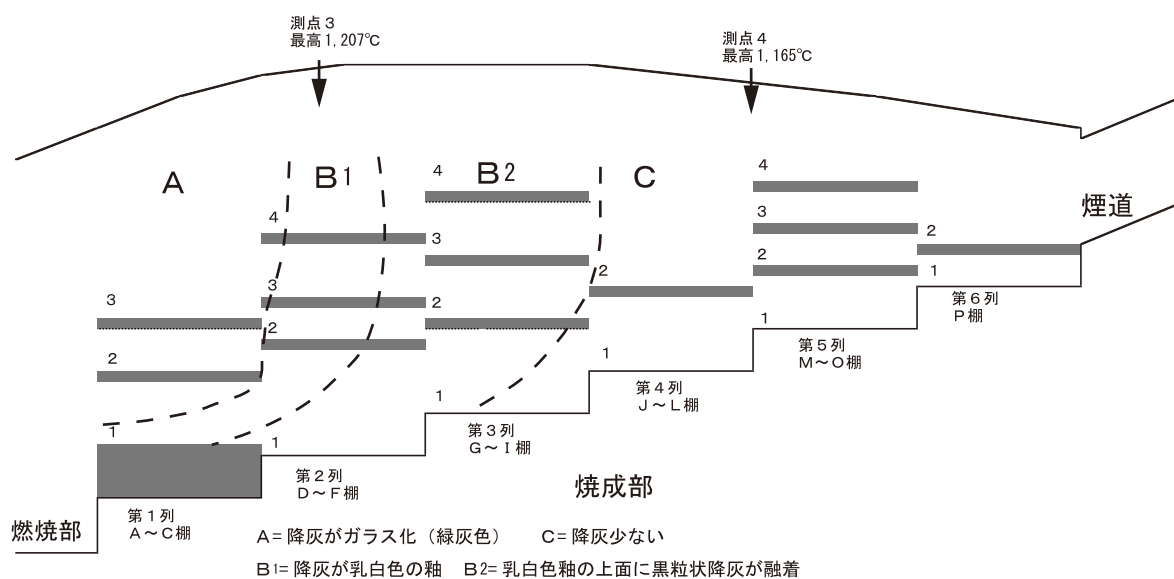
列	段	棚番号	整理 番号	完倒コーン 最高温度 (℃)	不完倒コーン 最低温度 (℃)
1	2	B 2	8	1,186	1,260
1	3	A 3	7	1,260	1,285
2	2	E 2	6	1,186	1,239
2	4	E 4	5	1,186	1,239
3	2	H 2	4	1,186	1,239
4	2	K 2	3	1,186	1,239
5	3	M 3	2	1,186	1,230
6	1	P 1	1	1,137	1,186

*完倒とは先端が下に接地したもの。測定にはオルトンコーンを使用した。

第3表 平成23・24年度 熱量測定



第1図 窯内温度の推移（測点3）



第2図 窯内焼成状況模式図



写真1 製作風景



写真2 窯焚き風景（開始71時間後）



写真3 排煙口からの黒煙・炎（開始72時間後）



写真4 閉塞状況（焚口側）



写真5 窯出し直前のオキの蓄積状況



写真6 焼成状況（前より2列目）



写真7 焼成作品の黒粒状降灰の融着状況（H3棚）



写真8 須恵器作品（焼成後）

石川県埋蔵文化財情報 第29号

発行日 2013(平成25)年3月29日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本確文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター